
神魔鳴動～裏切りの座～

バイアティス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神魔鳴動〜裏切りの座〜

【Nコード】

N6188W

【作者名】

バイアティス

【あらすじ】

「彼」は願い渴望した——「永劫に永劫と永劫を永劫無限に積み重ねてもまだ足りない。もっと歓喜をもっと愉悦をもっと恐怖をもっともっともっともっと——味わいたい——！！！」

狂おしき願いと渴望の先、「彼」の精神は個でありながら「世界」を上回り——最悪にして最低、最凶の「特異点」となり鼓動を始める。

存在あるものの皆、嘲笑い翻弄し策謀し、総て欺き裏切る。永劫
己が愉悦を味わんがための道理。

ここに『冷嘲熱罵・呵呵大笑』——神魔鳴動の「座」が生れ
堕ちた。

第零章「終端」発端」（前書き）

うん……色々あってしばらくぶりの復帰作なのに多重クロス前提なんだ。

主人公は作者別作品「裏切りこそ我が人生」から。
あくまで「IF」として考えてください。

後書きに色々と書いてます。

第零章「終端」発端」

これは「IF」の物語。

平行世界やら可能性時間やら、呼び方は様々個々人の自由。
しかし中身は同じ。

あつたかもしれない物語。ゆえに「IF」だ。

——魔法世界・旧オスティア「墓守人の宮殿」

無限に広がりを見せるかのような天空。

無数の岩塊が風の魔力で浮かび上がり、流れる雲と今まさに沈ま
んとする太陽との美しき調和がこの黄昏を永遠のように彩る。

だが、夜ももはや訪れようというのに世界は鮮やか過ぎるほどの
朱で染まっていた。

「それ」は血の如く鮮やかで、しかしそれ故どす黒く濁っている。
黄昏の世界を濁し汚す忌まわしい光だ。

だが「それ」は陽光であり、同時に月光である。

例え世界の万人が否と答えたとしても、「彼」にとってはそんな
のだ。

『カハ…カハハ、ハッハ……ヒャッハハハハハハハハハハ……！
！』

大音量。大絶叫。大喝采。

「彼」はまさにこの時、歡喜を持って声高らかに晒う。

狂おしいまでの凶気を孕むその声は、雷鳴の如く天空を駆け巡る。

だがしかし。

だがしかし、間違えることなかれ。

「彼」は他者を晒っているのではない。嘲笑っているのは、己自身に対して。

「彼」はそう、永劫の転生を数多巡り歩いた可能性の世界で、「最も最悪の結末」を己が迎えていることに晒っている。嘲笑っている。

『カハ、ケハハハ……！ ヒヒ…… あー笑えねえなあオイ。笑えなさ過ぎて、逆に笑えてくるぜえ！』

ああ、全くもって何だこの展開は。

己は知らない。こんな可能性があるなど知らない。

無限とも思える転生を繰り返してきた「彼」にとってすらそれは未知の展開だった。

天空に舞う太陽にして月。

神にして魔の具現。荒ぶる暴虐者にして嘲笑う者。

「彼」は己を指してそう自負している。しかし、そんな自身すらも「これ」は無理だろう。

「貴方はもう戦えない……降参してください！」

若き次代の英雄が、その気高くも勇敢な魂を持って叫びあげる。

「あんたのせいで多くの人が傷ついた……でもこれでお終いよ！」

英雄の傍らに寄り添う、今はなき亡国の姫が勇ましく剣を掲げる。

「嘲笑う月……僕たちを利用してきた罪は君自身で償え」

造物主の生み出せし白の少年が、無数の黒杭を展開する。

「よもや貴様との決着がこのような形になるとはな……」

最強の魔法使いの一角、不死の吸血姫がさもつまらなそうに見下ろしている。

「はっ！ 裏切りの結末がまさかこんなになるとはなあ……運がねえなてめえも」

現役最強クラスの傭兵にして英雄が、千変の魔法具をもって不遜に笑う。

「汝を捨て置いたのは私の責任……さねど、この世界を混沌に導き破滅させようとした貴様はここで抹消しよう。今度こそ完全に」

魔法世界の造物主にして始まりたる存在が、曼荼羅の如き魔方阵を形作る。

世界に名だたる英雄が、次代を駆け巡る若者が、造物主の軍勢が、そして魔法世界各国の軍が「彼」を完全に包囲しつくしていた。それは物理的にも精神的にも強固過ぎるほどの壁。もはや結果と呼んでもいい。

（どこで選択肢を間違えたかねえ……マジでこりゃあ無理だわ）

幾つも存在する可能性の中でも間違いなく最悪。確実に滅びる結末が見える。

抵抗など許されない。あの若き英雄の卵やその従者たちはともかく、他の者たちは決して逃そうとはしないだろう。間違いない。

今まで散々弄ってきた。散々嘲笑ってきた。

己の所業で絶望の淵に堕ちいく者たちを見続け、そしてそれを喜びとしてきた。

ゆえにこの結末は自業自得。因果応報だ。

それに関してはなんら異論はない。むしろこれまで楽しませてくれた礼として、「倒されてやってもいい」くらいだ。

とは言えた。

『全艦、精霊砲の発射体勢完了！』

『鬼神兵およびMM機甲魔法師団全隊の攻撃準備整いました！』

『旗艦スヴァンフヴィート、神罰砲の準備完了！』

メガロメセンブリアの艦隊に無数の鬼神兵と兵士たち、

『ヘラス獣戦鬼隊、攻勢準備完了！』

『黒い獵犬』のザイツェフだ。こっちもいつでもいけるぞ！』

『こちら管制！ 樹龍の出陣を確認した！』

ヘラス帝国とそれに雇われた傭兵たち、さらには樹龍が、

『アリアドネー魔法騎士団到着しました！』

『これより広域補助強化結界を展開します！』

中立であるはずのアリアドネー魔法騎士団までもが、「彼」という存在を共通の敵としてその物量という名の巨大で強大な矛を向けている。

『ヒハハ……おーおー怖いねえ。こんなボロ雑巾みたいな野郎をよって集って鬨ろうってかあ？』

まさに空前絶後。

魔法世界史に類を見ない、各国共同の連合軍。

そんなものが己にその武を突き立てようというのだ、もはや笑いを通り越し呆れてすらくる。

いまもなお増え続ける増援。

皆一様に士気が高く、たった一つのことを目的としている以上は準備も万全だろう。

それに対して、己はどうだ。

全長は軽く小山ほどもある己の龍体は、吸血姫と造物主の攻撃魔法を受け続け、堅牢なはずの漆黒の鱗はボロボロであちらこちらに流血が絶えない。

三対六本の背面から伸びる巨大な腕は、巨漢の傭兵と獣人の少年鳥人の少女との白兵戦の結果その手に握るべき剣の大半を砕かれている。

龍体を覆い隠すほどの大きさを持つ猛禽類に似た二対の大翼は、すでに二つが姫君の破魔の剣と白髪少年との戦闘により切り裂かれ、石化し使い物にならない。

己の放つ黒き太陽の焰も、妖しき月光の一線も、漆黒のプロミネンスが生み出す多頭の龍頭もあの若き英雄の雷の速度について行けず逆に翻弄される始末。

もはや満身創痍。死に体と言っている。

転生を繰り返す生の中、数少ない完全な肉体をもってすらこの結果。

やり過ぎたがゆえの

そして何よりも「彼」にとって計算外なことは、

『やっぱてめえを生かしておいたのが間違いだったわあ……だろう
ナギイっ！！』

「そりゃあこっちの台詞だぜ、クロウ！！」

紅き翼のリーダー、正しく世界最強の魔法使い、この世界における英雄。

「千の呪文の男（サウザンドマスター）」ナギ・スプリングフィールドがこの場に存在していることだろう。

「彼」——「裏切りの英雄」「月の嘲笑」「零落せし太陽」
——クロウ・クルーワツハは眼前の英雄たる存在を心から疎ましく思う。

ああ煩わしい。
ああ汚らわしい。

不快だ。
実に不快だぞ。

なぜ貴様がここに居る。
なぜ貴様が生きている。

不快。
不快。

不快。
不快。

不快過ぎて不可解過ぎて、己がどうにかなくなってしまいそうだ。
道理ではないのだ。

この男が生来の姿で、ましてこの時代に、この場所に居ること自体が。

(否——！)

道理など最初から無かった。

この男を生かしておいた時点で既に破綻していたのだ。
目の前の男とともに戦い、戦場を駆け巡ったこともあるのだから
とうに理解していた。理解していたはずだ。

この男——ナギ・スプリングフィールドの前に小賢しい計算
や策謀など意味をなさないことは。
あらゆる条理を不条理に落しめ、道理すらも覆す。
だからこそ人は呼ぶのだ、

『戯けてんじゃあねえぞ……この英雄きどりがあああああああ
あ——！！！！』

「てめえも人間舐めてんじゃあ……ねえぞクロウおおおおおお
お——！！！！」

もはや結末は語る必要はないだろう。

何時の時代も物語の締め括りは決まっている。

英雄は龍を退治し、龍は英雄に退治されるもの。

古々しくも愛される王道だ。

だからこそ、この「物語」はここで終わった。

——「IF」

だからこそだろう、「彼」の物語はここで終わらない。

何故なら「彼」は龍であり怪物であると同時に人間でもあったから。

禍しく狂う破滅の太陽とて何時かは沈む、だが「彼」は同時に月でもあるのだ。

終わらない循環。永遠に繰り返す無限の転生。

「クロウ・クルーワツハ」という神にして魔なる龍神は物語の最後に願った。

『永劫に永劫と永劫を永劫無限に積み重ねてもまだ足りない。もっとと歓喜をもっと愉悦をもっと恐怖を。もっともっともっともつともつと——味わいたい!!!』

その狂おしき願いと渴望の先、「彼」の精神は個でありながら「世界」を上回り——最悪にして最低、最凶の「特異点」が生まれ堕ちる。

存在あるものの皆、嘲笑い翻弄し策謀し、総て欺き裏切る。永劫己が愉悦を味わんがための道理。

ここに『冷嘲熱罵・呵呵大笑』——神魔鳴動の「座」完成せり。

第零章「終端」発端」（後書き）

「裏切りこそ我が人生」も後々更新する予定。

多重クロスとか言いつつまだ何とクロスさせるか決めてないです。
次回は主人公の近況を予定してますが、その後どうするか。

予定としては、

「女神転生シリーズ」「魔法少女リリカルなのはシリーズ」「とある魔術の禁書目録」などを予定（あくまで予定）

他にクロスしてみたって作品があれば感想にて受付ます。
もちろん作者が知っていればの話ですが。

次回の更新はまたも不定期ですが、よろしくお願いします。

第一章「無限荒野」（前書き）

「座」の説明までいけんかった・・・。

主人公が「座」であると同時に特異点でもあるという点について説明しなかったのだが、それはもうちょい先で。

第一章「無限荒野」

「——で、これは一体どうゆう状況なんですかねえ」

「彼」——クロウ・クルーワツハが目覚めた時、そこには彼しか存在していなかった。

メガロメセンブリアの艦隊も、ヘラスの樹龍も、あの忌々しい英雄すらも——何処にも誰も存在してはいなかった。

「此処」にあるのはただの荒野。
無限に広がる荒れ果てた大地だ。
生気も水気も何もない。いつそ砂漠とすら言ってい

最初は魔法世界の何処かにでも飛ばされたのかとも思ったが、しかしすぐにその考えは否定した。

あの状況で自分が生き残れた可能性は皆無。
万が一にも有り得ない。

当事者である己がそのことを一番理解している。

前後の記憶が定かではないことが懸念ではあったが、なにより分かりやすく此処が魔法世界ではない事を証明するものが天空に存在していた。

それは、己という存在を象徴する太陽と月の二つの星。

巨大で禍々しい太陽と、妖しく荒野を照らす銀月とが同時にある風景。

二つの異なる光源が二重の色彩となって荒野を彩り、そこに深い影色を生み出す異様な世界。

飢え渴く砂と岩と荒れた荒原の地。

「かはは……いくらなんでも、ねえ」

いくらなんでも、こんな光景は有り得ない。

いや、自分が知らないだけで世界にはこんな風景が拝める場所が存在しているのかもしれないが、少なくとも魔法世界には存在していなかったはず。

異様で異質で異常で、それでいて妙に此処が自分に馴染むのをクロウは感じていた。

この世界はとても落ち付く。

まるで「故郷」に還ってきたかのようなだ。

「まあ、故郷なんざあ知りませんけどね」

軽口を叩きながら、ふと思い出したように自分の身体を見ている。

その姿は龍体ではなく、人間としての自分の肉体。

傷一つない五体満足なその体は、まるであの戦場での出来事が嘘のように軽やかだ。

「ふむ——」

調子確かめるようにその場で片足を数回地にぶつけてみる。
そして、まず一步。

荒れ果てた地を踏みしめて、更にもう一步前へ歩を進める。

そうして果ての見えないその荒野を、クロウは特に目的もなく歩み始める。

ただ何となく、そうしなければならぬような気がしたのだ。

歩く。

歩く。歩く。

歩く。歩く。歩く。

歩く。歩く。歩く。歩く。

歩く。歩く。歩く。歩く。

歩く。歩く。歩く。歩く。歩く。

歩いて歩いて……

……歩き続けた。

変化らしい変化も、異変らしい異変も何もなく、ただひたすらに歩き続けるだけ。

終わりの見えない果て無き道に行くのは苦行に近いものがある。

自分がそこになんの疲労も感じていないのが不思議なくらいだ。とは言えいい加減飽きもするというもの。

「全く……誰かこの状況を教えて頂きたいものですねえ」

もともと——期待するだけ無駄だろう。

肌で感じる、魂で理解できる。

ここは異常だ。異質に過ぎる。

己にとつては単純に妙に馴染む世界というだけで済んでいるが、普通の人間——いや「生命」がまともに存在できるような場所ではないだろう。

ゆえにこれはただの眩き、独り言に過ぎない。

この場で自分の疑問に應える声など有るわけがない——はずだった。

「なら教えてあげようか」

それは唐突に、己の耳元で呟くような妖艶な女の声で——「それ」は応えた。

「——っ」

——聞くな!!

そう刹那の思考で確信した。

「それ」は聞いた者、見た者すべからく狂気に誘う魔性の権化。言葉にならない本能からの、精神（タマシイ）からの警告。

「大丈夫……怖がる心配は無いさ——さあ」

絶叫。

狂いの響き。

その声は人のそれではなく、もはや獣のあげる猛りに近い。

膝が砕けた。

全身から力が抜け、無様にも地べたに這いつくばった。

実に永く転生を続けてきたが、自分の魂が壊れる音を始めて聞いた——不可解なことだが、クロウはまるで他人事のように己が砕けるのを客観視していた。

（ああ……）

ほんの一瞬だった。

時間にしてわずか一秒にすら満たない。

たったそれだけの時間、あの存在を視界に納めた瞬間にこの有様。理解不能。

ほんの数瞬で理解出来てしまった。

あれは格が違う。

己のような人の世の魔性とはわけが違う。

あれぞ世界の外に住まう闇黒の具現。

我ら人の世に寄生する程度の闇などとは程遠い、宇宙規模の根源的邪悪存在。

陳腐な物言いになるが。

そうそれはまさに文字通り——次元が違う存在。

「おやおや——大丈夫かい？」

クロウはその今にも消え去りそうな思考の片隅で己を見下すそれを認識した。

それは見ていた。

まるで愛くるしい畜生を見るような目で、震え慄き両膝をつく哀れな道化を眺めるように。

そして嘲るようなその声色に、ぷつん——と自身の中できなが切れるような音を聞いた。

「ぬあめるなああああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああつつつ！……！！！」

魂が砕けた？

次元が違う？

知ったことか！

砕けたならかき集める！

次元が違うというなら考えろ！

集め繋ぎ直してあれに対抗できる術を、理論をくみ上げる！

あれは己を見て晒った。

得体の知れない目の前の化け物を前に怯える己を嗤った。

許さない。

許さない。

許さない。

断じて決して許しはしない。

何故ならそう――

「――俺を嘲笑っていいのは……………俺だけだあああああああああ
あああ……！」

「ふふ……いいねえ。じゃあ遊戯（ゲーム）を始めよう」

己の牙たる二振りのナイフを呼び起こし、黒く濁る焔の多頭龍を
纏い叫ぶクロウ。

それが、この先延々と繰り返される事となる邪神――（道化）との
始まりの邂逅と相成った。

第二章「混沌と自覚と門」（前書き）

勢いだけで書くところなる！

今回は戦闘シーンとクロウの渴望の一旦のみ。
流出したのかしていないのか、特異点なのに座であるとは。

第二章「混沌と自覚と門」

「あつはははH A H A あA A H A A あH A A H A H あああA A A
A ああA a a あつつツ！！！」

狂ったような哄笑を、耳障りなエコーと共に金切り上げる。

その姿は虚空に蠢く闇の化身から、より物質的な形態へと変貌していた。

それは不規則に脈動しながら収縮と膨張を繰り返す肉塊。
不愉快極まりない粘着性の体液で全身をぬめらせる。

伸縮する触手が人の型を冒瀆するように四肢を成し、大地を踏みしめ天を仰ぐように屹立する。 頭部とおぼしき円錐形のその表面に貌はなく、おぞましき邪声で咆哮する。

これぞ混沌の顕現——「月に吼える者」

狂人が人型に練り上げた粘土細工のように不細工な造形。

しかしそこには、脆弱な精神（タマシイ）など粉みじんに打ち砕くほどの恐怖と狂気が渦巻いている。

先程までのクロウならば、再び大地に膝をついても可笑しくはないほどの濃密な瘴気。

しかしクロウの魂を強固に繋ぎとめ、眼前の邪悪に立ち向かわせているものがある。

それは——怒り。

己の矜持と領分を侵す眼前の化け物に対する憤怒が、クロウを更なる領域へと誘う。

「……遊戯（ゲーム）だあ？」

「そう遊戯（ゲーム）さ。

ルールは……そうだねえ、僕に攻撃を当てられたなら、その都度君の疑問に答えようじゃないか」

当てられればの話しだけだね——嘲りの声。

「があっ！！」

どこまで戯れるのか、舐めるなど言った。

渴いた大地をじやりと踏みしめ——瞬間、音を置き去りに駆け出す。

間合いはほんの十数歩足らず。

その程度の距離など、あつて無いようなものだ。

疾駆する殺意そのものと化したクロウは、己の牙たる二振りの刃を一切の躊躇なく肉塊へと突き立てる。

ぞぶり——血液とも違う得体のしれない体液が溢れだす。

「まだだ！」

突き立てた牙をさらに奥へ奥へと。

腕を肘まで埋没させながら、クロウは吼える。

「体液ぶち撒けて弾け飛べや!!」

牙を媒介にした零距离での魔力爆発。

単純ながらクロウほどの魔力量で手加減なしに放てばどうなるか

——答えは明白。

「おおつと!」

閃光と一瞬の間を置いての強い衝撃。

肉塊はその内側からの強い圧によって弾け飛び、半身を根こそぎ失っていた。

飛び散る肉片と体液を不愉快そうにぬぐい、クロウは攻撃の結果を待つ。

「エクセレンツ―（お見事）！」

——と言っても、最初はサービス。一度も当たりの来ない不公平（アンフェア）なゲームは面白くないしね」

「……ちっ」

半身を失っているはずだが、そこに苦しみの感情など一切感じられない。

その惜しみない賞賛の声とともに、切り裂き穿ったはずの肉塊が再生を始める。

じゅぶじゅぶと、不快な音とともに肉が内側から湧き出る。そして、ものの数秒もたたないうちに完全に傷を塞ぎきる。

「ふふ…… まあ約束は約束だ。ちゃーんと疑問は答えよう」

—— 僕は約束は守るタイプだからね。

「ではまず最初の疑問—— 此处は何処か」

それはクロウが最初に抱いた疑問である。

「答えは君の中にある…… おおつと冗談冗談！

ふふ、いや冗談でもないかな？

此处はね、君の願望と切望と渴望とが入り雑じる、世界で唯一無二の君だけの世界さ」

どういう意味か—— と口にする前に、既に混沌は次の動きを見せていた。

腕が解ける。

正確には腕の形で束ねていた触手をばらしたただだが、その数は既に十を越していた。それら一本一本が更に枝分かれし更に増殖する。

「続きが聞きたいのならもっと攻めておいでよ！ 短いながらもサ―ビス期間は終了だ！」

触手の洪水に飲み込まれまいと、全力でその場から離脱する。蛇のようにしつこく追いかけてくる触手はいまやその数を百の単位にまで増やし、更に更にと増え続け……もはや本体たる邪神の姿すらも視認できない。

クロウはこの窮地を驚異的な身体能力と勘で回避し続けるが、そんな幸運に頼ったようなやり方でこの邪悪は切り抜けられない。

「——ちつ！ 暗く深く重々しく聳える山脈の底。煮え滾る溶岩の申し子よ……！」

己の力だけで切り抜けられないならば、他を利用するまで——
—空を切り裂かん勢いで一枚のカードを触手の群れへと放り投げ、召喚の呪を謳い上げる。

呼び出すべきは焰の申し子、煮え滾る溶岩の海を住まいとする溶岩竜（ラヴァードレイク）、彼の竜の火力ならば目の前の触手程度焼き払ってお釣りがくる。

だが――

「――なんだ!？」

クロウの魔力を受け取り、契約と魔方式の理論に基づき形成されるべき召喚門が発動しない。

召喚の失敗――それはクロウにとって生涯初の出来事。そんな彼の啞然とする表情に、無貌の愉悦が嗤って答えた。

「ふふ、当然だろう？ ついさつき君も言っていたじゃないか――
――此処は異質だ異常だつて。此処に人間はおるか並みの生物じゃあ生存も出来ないってねえ。」

ある意味正解である意味間違ってるのさ。此処には君と僕のような例外を除いては存在できない――ここに存在できるのは世界の中心たるべき者が、あるいは外なる者が」

戯言じみていながらも、真実味を含んだ物言い。

だがクロウにはそれを認識しているほどの余裕はない。

召喚の失敗など本来あり得ないことであり、混沌の説明が聴こえていたとしても到底許容できるような事態ではなかった。

ゆえにそれに気付くのが遅れたのだ。

「しまっ——！？」

それは地面を穿ち砕いて突き破り、クロウの背後を取っていた。前方に集中し過ぎたこと、そして召喚の失敗に一瞬とは言え氣を取られたことが災いした。

完全な不意打ち。

視線すら向ける時間もない。

肉体を動かす暇もない。

氣配を察知できていても、この刹那をどうにかできるものではなく。

思考の加速——体感時間の遅延——背後より迫る触手の暴虐。

「——」

氣付けば——その暴虐は細切れに寸断され、大地にぐちゃりと音を立てて落ちていた。

「あっはははは——いいいいよ！ 今のを避けるなんて素敵に不敵だ素晴らしい！」

拍手とも呼べない、触手をべちべちと叩かせながらの喝采。
その声色は心底愉しそうで、かつ多少の驚きも含まれていた。

どうやって、今の一撃を回避したのかと。

「まあ——とは言えまさかの二撃目だ。さあ、次の疑問に応えようか。そつだなあ、次は——ん？」

（——なんだ……？）

しかしその問いに対して、避けた当人が一番困惑した。

回避や防御がどうか、それ以前の話し。

先の攻撃など自分には見えていなかった。

気付いた時にはもう遅い、とうにあのおぞましい触手の群れに蹂躪されていなければならないはず。

だが結果は違った。

あの不意打ちに対して気付けばこうして対応し、反撃すらやってのけている。

自分は、こうして五体満足で生きている。

その不可解な現状を——しかし当然だとも認識していた。
何故なら、この世界で「自分を欺き出し抜くことなど不可能」なのだから。

瞬間——

(ああ———そういうことか)

———それを自然と理解した。

否、最初から「知っていた」のだ。

あれは———あの天空に座す太陽と月は自分の眼であり手足であり顎だ。

此処は、この「世界＝宇宙」は己なのだ。

妙に己に馴染むのは当然のことだった。己自身なのだから。

異質で異常で異様なのも当然のことだった。己自身がそうだから。

この世界を構成する全ての要素は、すべからく己であるのなら——

———迎撃できて当然のこと。

最初から見えていたのだから。

見えているという事実を思考のほうで理解していなかっただけのこと。

此処は己の内側、全ての事象は最初からこの手にあって、見えているのが当然のことなのだから。

この世界の事は理解した———ならば次は、更にその先の段階へと進むだけ。

「ふふふ」

「———」

あの不愉快な肉塊は、己の肉体に無断で乗り込み我が物顔で這いずる寄生虫だ。

ならば虫は虫らしく、潰してやらなければならないだろう。

この世界で己を嘲笑えるのは己だけだ。

それ以外の全て、取るに足らない雑物だ。

だから——いますぐ屠殺（ころして）やらねばならないだろう。それが道理というものだ。

その殺意の念に対して、世界「己はすぐさま応えた。

「——へえ」

変化は一瞬。

天に輝く二つの禍星は、世界を燃やす暴威の化身となる。

太陽はその焰を煌々と燃やし、大地を焦がし飢餓の焦土へ。燃やし焼き払い消し潰せ。

月はその妖光を肅々と煌かせ、大気から水（生）気を奪い渴かす。邪性を嚼つて浄化しろ。

激烈で劇的な変貌。いや、これが真の姿。

神座の主の餓えと渴き——永劫に満たされない渴望を体現し具現するもの。

いまやこの世界は、クロウが認めた者以外の全てを喰らい尽くす
邪龍の顎。滅殺の処刑場。

砂塵の荒野は更に、更にと急速に枯渴していく。

それは、混沌ですらも例外ではない。

「あつははは！　なんだいもう「思い出した」のかい？　読者サー
ビスがなっていないクロウ君！　ここは最後まで苦戦しながら僕を
出しぬいてパズルのピースを集める場面だろうに！」

どこまでも、どこまでも愉快そうで人を馬鹿にしたような物言い。
その出来そこないの人型は、既に末端から崩壊を始めていた。

先程まで大地を埋め尽くし蠢いていた百を超す触手は、強制的な
餓えと渴きに晒され死滅し、その本体すらも龍の顎に捕食されよう
としている。

「ああ、つまらないなあクロウ君？

他者へ対する強制的な餓えと渴きの押しつけ？　自分を意味する
太陽と月による焼却と浄化？

そんなものじゃあない——君の渴望はそんなんじゃあないだ
ろっ？

こんな中途半端な「流出」じゃあ、神座へは至れやしないはずだ。
なら君の真とはまさに——」

「少しは黙れや化物———すぐにその軽口叩けないようにしてやるからよお……！」

戯言なのだ。

虚言なのだ。

そこに真実の欠片は含んでいても、己の「願い」に届かない。

我が願い———「永劫嘲笑し続ける唯一の自分でいたい」ならばそれを体現するための世界の絶対ルールは一つだけ。

欺かせない、騙らせない、嗤わせない、嘲笑せない。
それをするのは俺だけでいいのだ———！

悪夢の玉座で永劫緩やかなまどろみと共に流出させ続ける白痴の王すら嘲笑する———混沌たる邪神すらもこの絶対の法の前に屈するがいい。

この餓えと渴きを癒やすものはただ一つだけ。
だから俺に嗤わせろ、その愉悦の歡喜を俺に寄越せ———！！

だが混沌はそれすら意に介さない。

あらゆる法も、あらゆる道理も全て飲み込み嘲笑うがゆえに「混沌」

「さあ———これで終幕となるか否か……確かめて上げよう」新

しき神「よ」

もはや人型ですらないその無様な肉の塊は、無貌を歪ませ高らかに吼える——！

「煮えたぎる混沌の核よ——！！！」

ドクン——その胎動とともに、クロウの世界に膨大、莫大、絶大なる高密度のエネルギー嵐が生まれた。

天の二つ星をも極大の閃光で覆い隠し、溢れ出る力の副産物である高温の熱量は大地を焦がし熱し融かそうとする。

そこにあるのは一つの光球。

あまりに莫大なそのエネルギー密度はただそこに存在するだけで、あらゆるものを滅却せんと盛んに燃える。

ああ畏れ慄き、仰ぎ見るがいい——これぞ原初なる光輝。かつて混沌の顕現その一つが人類にもたらした、夢のエネルギーにして最悪の兵器。

熱い悩む神の炎——「核」の力なり。

二つの禍星をも圧倒する神の力の具現は、クロウの生み出す地獄すらも更に苛烈に塗り替える。

新たな太陽の猛威に、しかしクロウは不敵に嗤う。

—— 忘れたのか邪神。俺という存在がなんなのか。

「—— その程度でえ……」

この身は零落したが、古の時より死と再生の象徴たるを背負った者。

「—— その程度の熱量でえ……」

かつて天空にありて人界を嗤い、永劫輪廻の転生を繰り返す者。

「その程度の焰（ヒカリ）でえ……この太陽（月）を焼き潰せるなどど、思ったかよおおおおおおお！！！」

—— 太陽の化神であることを忘れたか！！

一瞬の閃光。

膨れ上がる「核」の滅光のなか、浮かび上がるのは巨大な影。神であり魔であり、太陽であり月たる黒き龍の姿。禍星を従える闇色の恒星。神座の主。

二つの超越する力は、億度の熱をも通り越し時間も空間も焼き払い滅却する。

拮抗する光はやがて少しずつだが、片方を飲み込み始める。

即ち——混沌の核を。

嘲笑う結果を生み出す為に、ただそれだけのために混沌をも我が顎へ。

混沌の顯現「月に吼える者」はついに囚われ、沸騰し蒸発し弾け飛び——そこに虹色の球体が生まれた。

「これは――！？」

「さあ——！　物語（パーティー）は始まったばかり！　否！
否！　否！　ここから始まる！
いざ、いざ「門にして鍵たる神」を潜りぬけ、さあ行け我らが主
人公（クロウ・クルーワツハ）！」

第一幕は最初から最高速のクライマックス！！

主演は君で、スポンサーはこの僕「ナイ■ルラ■テップ」！
そして監督は枯れ果てた老木、双頭の蛇（カドウケウス）にして水
銀の星（メルクリウス）……」

虹色の球体——あらゆる時間と空間に接するその存在は、暗黒天体を彷彿とさせる強力でクロウを引きずり込む。

「てっめえええええええええええ！！！」

「あっ ははは あはっ はあはっ はあは！！ 素晴らしい物語を期待

しているよ新たな神、「旧神」よ！！！」

邪神の狂った嗤い声を背景に、世界〃クロウが「門」の奥底へと消え去った。

残ったのは無音の静寂。

舞台は「永劫回帰」の物語へと移る。

第二章「混沌と自覚と門」（後書き）

現段階ではナイアさんの方がやり手だったり。

ちなみに仮にクロウが流出して世界を塗り替えたとしたら……ある意味では人間らしい世界になるのではと。

閑話「混沌の宇宙／因果の番人たち」（前書き）

今回は黒幕たちの話し。

主人公が永劫回帰の物語へ送られ始める前、別の視点では何が起こっていたのかって話。

長くなったので前後編です。

閑話「混沌の宇宙」因果の番人たち」

「あーあ、暇だなー」

煮え滾り、常に湧き立つ混沌の坩堝。

禍しくも莊嚴なる紅蓮の世界だ。

この宇宙こそ、数多存在し無限に分岐し続ける世界の、更に外側に存在する超々々高次元宇宙。

原初の世界というものがあるのなら、「此处」がまさにそうなのだろう。

超高熱と絶対零度が入り混じり、宇宙線や電磁波の類が様々行き交い、鮮烈な朱の極光が狂ったように曲がり捻じれながら精神を侵し乱す。

弱者の存在を微塵も許さず淘汰し、絶対強者のみが其処に生き続けられる。

そんな混沌の宇宙、その中心——紅蓮の宇宙に一点のみ異彩を放つ黒の領域。

まるで眼球のような印象を持たせるそれは、超絶した超重力の塊であり、常人では一瞬たりとも存在し得ない濃密極まりない瘴気で満たされ、この宇宙を構成する諸要素をこちゃこちゃと無造作に混ぜ合わせて創られた混沌の渦——どこまでも純粹な闇黒であった。

「ひまひまひまひまー」

「ふふ……今日は随分とご機嫌斜めじゃないか？」

そんな超絶闇黒の宇宙の中心には——不釣り合いなテーブルと一組の椅子。

静かに湯気をくゆらせる紅茶のカップ。

異常で有りながらも、それがさも自然なことなのだと言わんばかりだが——そんな不釣り合いな場に居合わせるのは二人の女性だ。

一人は黒のスーツを着た美女。

黒髪を後ろ手に纏め、ぴしっと決めたスーツは胸元を強調するようなデザイン。モデルだと言われても納得のいく絶世の美女だ。

ただし——その頭には傾国の……と付けざるを得ない妖艶という言葉だけでは説明出来ない雰囲気を出している。

ただあえて一言で彼女の事を表現するとすれば——黒、というのが自然なのだろう。

もう一人は片割れの美女とは違い、十ほども下に見える少女だ。

無論、この濃密な瘴気に侵された宇宙で涼げな表情で紅茶を飲んでいるような少女が、見た目だけの存在なわけではないのだが。

銀とも灰色とも見て取れる豊かな髪の毛と、猫のように大きな瞳が可憐さを引き立たせている。

しかし、その背には人には存在しない赤翼が二対存在し、まるでレオタードのような薄い下着の上に、少女には不釣り合いな軽鎧を纏っていた。

「別に不機嫌ってわけじゃないよ？　ただ暇なだけ——あーあ、こんなに暇なら誰か他に連れてくるんだったかな？」

「へえ……例えば君がご執心の「彼女」とか？」

「ベルちゃんとは絶対自分じゃ来ないと思うけど——無理やり連れてくるのも楽しそうだなー」

ふふ——「彼女」とやらの表情でも想像したのだろうか、顔がにやけている。

碌でもない事を考えているのは確かだが、その顔はまるで恋する乙女のような。

「でもまだ駄目……遊ぶならちゃんと準備を整えてからじゃないかね」

「やれやれ。君に目を付けられた彼女が可哀想だよ。いや、逆に羨ましいかな？」

僕の愛する白の王は何時まで経っても振り返ってくれやしない。なかなか、思い通りにはいかないものだよ」

心底残念そうに溜息をついていながらも、その顔は実に楽しそうだ。

まるで、手のかかる我が子を見守る慈母のように。

あるいは、「果実」が最も美味しく熟す瞬間をじっと待ち続ける刈り手のように。

そんな美女の姿を見て、翼の少女は呆れながら言い放つ。

「思い通りにいかない……ねえ。確かに貴女が一番推し進めてる計画は進みが遅いかもだけど、その他は順調に進んでるじゃない。」

策謀に策謀と策謀を延々と積み重ねて、神々の目を盗みながら、神々を騙し続けながら、今この瞬間も物語は綴られている。

世界は貴女が描いた脚本通りに動いてるっていうのに、その台詞は他の世界の同業者に失礼だよ？　ねえ「黒幕」さん？」

「あつははは！　確かに確かに！　でも、その物言いじゃあ僕一人だけが悪者みたいじゃないか。君だって共犯者だろう？」

「んーまあ、確かに？　でもこの「物語」の首謀者は貴女だってことには変わりはないじゃない？」

からからと——否定せずとも強かに反論してくる少女の反応は黒の美女にはとても愉快だったのだろう。
笑いながらカップに残った紅茶を啜る。

「そんなに暇なら……ほら、「あれ」に参加してきたらどうだい？　今ならまだ獲物が残っているんじゃないのかな？」

「嫌よー。私まだ死にたくないし」

「おやおや！　「冥刻王」ともあろう方が随分と弱気な発言だね？」

「Lv差くらいは弁えてるってこと。それに——やっぱり駄目

ね。今から全速力で行っても間に合わなさそう」

「ああ……確かに。もうじき終わりそうだ」

黒の美女は宇宙の果てを見る。

瘴気と闇と空間歪曲によって歪んだ光景。だが、彼女にとってはそんなものは障害にすらなりはしないのだろう。

翼の少女もまた、彼女に倣い宇宙へ視線を送る。

「「おおおおおおおっ！！！」」

紅蓮に燃える宇宙に閃光の華が咲き乱れる。

無音の闇黒に響いたのは、二人の男の声と超絶の力のぶつかり合う音。

即ち、戦場。

そこに居たのは二体の機械。

一体は黒い天使。

黒き鋼で全身を鎧い、赤の双眸と翠の光翼持つその姿は墮天使の如くだ。

その手には翠の刀身を持つ片刃の剣を持ち、混沌の宇宙を疾走する。

もう一体は黒金色の悪魔。

金と黒の装甲で身を包み、その背に蝙蝠の如き翼を生やして威風堂々と佇む姿はまるで悪魔の王。

その手には死神の鎌と呼んで相応しい武装を持ち、相対する者を死へ誘うだろう。

両者ともに「元の世界」では最強の—to 数えられる人工の機械神。因果律の番人を自負する存在である。

互いが互いに争い合えば宇宙そのものが崩壊しかねない、極大の力の権化。

だが――

「くつ……損傷が64%を超えたか！」

「こちらもだ……修復が追いつかん……！」

機械神たちの頑強な装甲には無数の傷跡。

生半可な攻撃なら容易く受け止め、そも亜光速の速度にまで達するであろう、その戦闘機動力に追いつける者など宇宙広しと言えどそう多くない。

だが現実問題として、彼らは追い詰められていたのだ。

赤黒く沸騰する宇宙の彼方、圧倒的な威圧感と存在力を放つ者たちによって。

それは三千世界、広大な多元時空の中にあつて普遍たる最強の権化――ドラゴン。

それぞれが全長数キロメートル単位の、まるで小惑星の如き大きさを持つ巨大な竜たち——それが三体。

一つは、焰の如き赤の鱗に包まれた、紅蓮の炎を纏う巨竜。

一つは、戦場を俯瞰する軍師の如き冷徹さを持つ、蒼氷を纏う巨竜。

一つは、野望に満ちた眼光を隠すことなく晒す、老獪な巨竜。

いずれもが三千世界の数多で認識されるドラゴンという外見をしている以外、まるで異なる別々の個性を持ち——その身に内包しているであろう力は更に未知数。

「Z・Oソード！」

『……………ふん』

黒き天使は翠色の光翼を広げ、一瞬にして亜光速の域にまで加速——圧倒的速度を保ったまま、一番手近な赤いドラゴンへと突撃し片刃の剣で斬りかかる。

その結果は果たして、無惨——片刃の剣は火花を散らすことも、金属音を響かせることも無かった。赤いドラゴンの甲殻の表面……身に纏う炎の圧倒的火力と熱量の前に融けて消える。

「馬鹿なっ！ ゾル・オルハリコニウム製の刃が！」

『それだけか？ 無様だな……そんな様でよくも因果律の番人だなどとはざけたものだ』

劫火を纏う巨竜は悪意と呼ばれる感情以外の何も含まない冷徹な声で告げる。

圧倒的な体格差——黒の天使から、ドラゴンの頭頂部までおよそ三キロの距離は近くて遠い絶望的な間合い。

続いて動いたのは、紅蓮の緋竜。

吼えることもしなければ、最大の火力を放ちうるであろう顎を開くこともない——そんな必要すら認めないと言わんばかりに、一対の巨大な翼を空間に叩きつける。

「くっ……！」

生まれたのは劫火の雨。

一つ一つが黒の天使の全長に匹敵する巨大で凶悪極まりない火炎弾だ。その熱量はまさに筆舌にし難いものだろう。

だが、その攻撃を黙って見ている機械神たちではない——対応したのは黒金の悪魔王。

「我が敵を破砕しろ……ガン・スレイヴー！」

王に使える悪魔の眷属——主に敵対するものを撃ち破砕する翼持つ銃魔。

一撃一撃は王に遠く及ばずとも、一つの意味によって統率された銃魔たちの連携射撃は、降り注ぐ火球を悉く撃ち落とす。

『カッカッカ……』

底冷えのする老爺の声が聴こえた。

刹那、極彩色の光線が銃魔を襲い——主たる王と黒き天使にその銃口を向けた。

「どうしたガン・スレイヴ!？」

「これは……操作系を乗っ取ったのか!」

『カッカ……我が享樂の支配の前には、いかな存在であれ魅了され堕ちるだけよ』

実に容易いことだ——そう笑いながら応える声には邪悪さしか込められていない。

自らの眷属を支配され、その銃撃に晒される。そして当然、迎撃されることの無かった火球弾もまた機械神たちを襲いだす。

「くそっ……戻れガン・スレイヴ!」

「いかん……防ぐだけでは勝てんぞ！」

『おお？ もう戻してしまうのか？ つまらんな………実につまらん』

『所詮、こんなものか。我らドラゴンロードにはやはり及ばぬと……』

世界の因果律を守る因果の番人すら圧倒する二体のドラゴン。

悪意と侮蔑の言葉を投げかけた。

炎の嵐はまだ収まらず、彼らの言葉に反論する余裕すら奪わんばかりの猛攻が続く。

しかしここで倒れるような者が、世界の守護たるを自称したりはしない——黒の墮天使と黒金の悪魔王は、この場で取れる最良にして最大の攻撃手段に打って出る。

それは、己たちが持つ最大最強の火力・武装を持って、一撃でこの戦闘に幕を下ろすこと。

「ティプラー・シリンダー起動……！」

「廻れ……デイス・レヴ！」

黒き墮天使の胸に内臓された機関——ティプラー・シリンダーが唸りを上げる。

並行する宇宙、異なる次元階層からそのエネルギーを引き出し、

時間すらも歪ませ始める。

黒金の悪魔王の胸が開き、その心臓——デイス・レヴが静かに、しかし力強く咆哮する。

宇宙という宇宙から、負の無限力と称される霊なる力を引き寄せ、因果すらも歪ませ始める。

「虚空の彼方へ消え去るがいい——」

「無限光の中へと消滅しろ——」

完成したのは巨大な光球。

時間も因果も超える、機械神たちが行使しうる最強の兵器。二体の機械神の代名詞たるに相応しい幕引きの一撃。

「インフィニティ・シリンダー——！」 「アイン・ソフ・オウル——！」

叫び——それは放たれた。

時空間を歪曲し破壊し、時の理にすら叛逆する究極の一撃が闇黒の宇宙を破壊しながら突き進む。

そしてそれぞれが、十個の球体——中性子星へと分裂し、真っ直ぐに巨大なるドラゴンへと直進していった。

『……………なるほど、それが貴様らの奥の手か』

究極の破壊が執行される瞬間、二体のドラゴンの前に座したのは
蒼氷の竜。

何をしようと言うのか——だがもう遅い。

機械なる神の放った一撃は発動した。もう止められない。あれは
そんな程度のものではないのだから。

『……………！！』

解放された二つの究極は、緻密に計算された十の中性子星の発生
させる時空間歪曲によって対象の存在を逆行させ始めた。

これぞ究極の時空間兵器——「インフィニティ・シリンダー」
と「アイン・ソフ・オウル」。

蒼氷の巨竜は叫び声すら上げることが許されず、その身の時空連
続体を破壊され存在を抹消される。

強制的な時間逆行による対象の歴史からの抹消——それがこ
の兵器の本質だ。

歴史からの消去という、この力の前にはいかに強大な相手である
うとも耐え切れるものではない——はずだった。

「やったか……！」

「……………いや、まだだ……！」

『対象の時間の巻き戻し、それに伴う消滅か……ヒトの生み出した兵器とは言え大したものだ』

蒼氷の竜は、果たしてそこに存在していた。傷一つない完全なる姿のままで。

まるで時間そのものが停止し、凍りついているかのような――
――。

『「歴史」は決して失われない。それは書にのみ刻まれるものにあらず。ヒトの魂が、大地の記憶が、過去を凍らせ、永遠に留め置くのだ。』

……最も、その力が「本来の完全な型」で執行されていたのなら――
――いかな我とて滅びていたであろうが、な』

「どつという意味だ……！」

「――まさか！」

蒼氷の竜の言葉に、黒き堕天使が何かに気付いたように声を上げる。

それは絶望的な真実への扉だ。

『――この深遠なる領域で、我らの『世界』で、我らに挑んだこと自体が間違いなのだ。』

此処は「混沌」の宇宙であり、同時に我らの創り上げた異界でもある』

緋色の赤竜が笑う。

『カカカツ、最初から枷を填められた状態で闘っておったということだ主らは』

老獺なる竜が嘲ける。

『貴様ら自身の世界でならともかく——ここは我らの「宇宙」——勝てる道理などあるまいが』

蒼氷の竜がただ語る。

真実とは残酷であるがゆえに真実。

巨竜たちの言葉は重く機械神たちへと押し掛かる。

「だが、ここで諦めるつもりはない——！」

「それが俺たちに課せられた使命——！」

しかしだ——もはやこの闘争に意味など存在していない。

敗者はただ消え逝くのみ。

ゆえに——

『使命に殉じるか——ならば我が支配する「歴史」の、「時」の力の前に平伏すがいい。我が絶対の結界——「フリージング・

タイム・ゲートへと」

蒼氷の色が紅蓮の宇宙へと侵蝕する。

空間が、時間が、歴史そのものが悲鳴を上げる。

それは「門」だ。

光も時も何もかもを凍てつかせる蒼氷の門。

「「——おおおおおおおおおつ！！！！」

「巡るがいい自らの『歴史』を……そして選択するがいい。生か死か。」

そして――自らの歴史を振り返り、「フリージング・タイム・ゲート」を超えた時、その時には貴様らに真実絶対の死という「歴史」を与えてやるっ」

それで終わり。

二体の機神は蒼氷の「門」へと吸い込まれ、歴史の渦の中へと消え去った。

彼らが送られたのは「自らの歴史の転換点」、可能性世界の分岐にして「歴史」が変わるその瞬間へと巻き戻されたのだ。

彼らがこの闇黒紅蓮の宇宙に舞い戻るのは――まだ未来のお話である。

そして、紅蓮の宇宙の内部では、もう一つの戦場が生み出されていた。

閑話「混沌の宇宙／人なる修羅と宇宙最強」(前書き)

遅くなって申し訳ありません。

仕事も忙しい時期を過ぎたので、ようやくとの更新です。

まあまたすぐ忙しくなるのですが……

閑話「混沌の宇宙／＼人なる修羅と宇宙最強」

紅蓮に燃える混沌の宇宙。

因果律の番人と三体のドラゴンとの戦いが終結へと向かっていた頃――こちらでもまた、一つの闘争に区切りが付こうとしていた。

閃光、無音の爆発、微塵にかき乱される空間。それは力と力。意思と意思とのぶつかり合い。鮮烈にして激烈なる、魂と魂とを掛けた死闘。

対峙するは二つの影。

一方は全身に奇妙な刺青と首筋に角を生やした青年。

一見平凡そうだが、その表情はまるで凍りついたように無表情。

しかし繰り出される連撃は紛れもなく戦の熱を帯びた灼炎。

徒手空拳でありながら、その身に宿した魔力の強大さは高位の魔性すらも滅するであろう事が容易く感じられる。

対するもう一方は、ただただ赤いとしか形容できない大柄長身の男。

その燃え立つ火炎のような赤の髪。

長身で均整のとれた、しかし細身とは呼べない屈強な肉体。

傲岸不遜がそのまま具現したかのような自信と力に満ちた顔。云わば、王の相。

驚愕するべきは、互いに生身であるという事。

常人どころか並みの超人程度では容易く飲まれ狂う混沌の宇宙にあつて、両者互いに着の身着のまま、纏う魔力だけで己の世界を構築しているのだ。

「ふははははは！ どうした「混沌王」とやら！ その程度で我を倒せるなどと本気で思ったか！！」

尊大な態度でその手に獄炎の塊を作り出し、勢いのままそれを投げつけてくる男。

音速など容易く突き破って直進するその一撃は、込められた魔力の量に比例して凶悪の一言。

無論、青年もただ黙って受けるはずもない。

「ジュアッ！」

腕を無造作に振るう。

ただそれだけの動作で空間が断ち切れた。

断たれた空間の断層は容易く獄炎を遮断し切ってみせるが、しか

し――

「そらそら！！ まだ終わっておらんぞっ！！」

男の言葉通り……先の炎と同規模の威力を持つ炎弾がさらに倍以上の数で放たれた。

到底避けられる規模ではない。

青年は、しかしなにか覚悟を決めた表情でその場に身を構えた。

「……はっ！ どうしたどうした！ 臆したか？ 諦めたか！？」

「……………」

男は青年のその姿を見て揶揄を飛ばすも、内心ではそんなはずが無いなと確信していた。

なんのつもりかは皆目検討がつかないが、青年の不退転の姿勢は大いに興味がわく。

（ふん——面白い——！）

言葉には出さずとも態度で示す——やって見せろと。
何をしようとそれごと呑み込む食らい潰す。その姿はまさに強者の余裕からか。

だが——その余裕も次の瞬間に凍りつく事となった。

「……ハアッ！！」

「なにいつ！？」

青年目掛けて放たれた火球は、その灼熱の舌が青年の肉体を蹴る
一歩手前。それこそ皮一枚の距離で一瞬停滞し——瞬間、元来
た方向へと。

まるで見えない壁、あるいは鏡によって「撥ね返した」かのような現象。

いや、事実そうなのだ。

それは受け止めたのでも、散らしたのでもない。文字通りの反射。
そう——反射だ。

獄炎の火球に込められた威力はそのままに——それを放った
男の元へと還る。

「ぬうおあああああああ——！！？」

思いがけず声を大にして驚愕の声を上げるも、一秒ほどの間もなく
劫火に包まれ声ごと消し去れた。
続いて訪れたのは、まるで分厚い硝子盤を強引に踏みぬいたような
鈍い音。

——ミシッッッ……！！！！

通常考えられる爆音とはまるで異なる異音。
込められた魔力の強大さを物語るそれは、物質のみならず空間ごと
と燃やし砕いて粉碎した音だ。

魔法の反射という、男の元居た世界には存在しなかった特異能力――（この場合は後天的体質か？）は、見事に赤の男を焼き尽くした。それこそ呆気ないとすら言えるほどに。

しかし、その代償は決して容易いものではなかった。

「か……はあっ……はああ、っぐっ……！！」

青年の顔は極限まで青褪め、四肢には碌に力が入っていない。死人と勘違いされても可笑しくないほどに、その生命力は削り取られていた。

しかし、この結果は当然だ。

青年の特質としてある能力に、特定属性への耐性の付加というものがある。

読んで字の如く、火あるいは雷、氷、果ては純粹に物理的ダメージに至るまで、その現象に連なる攻撃によるダメージを軽減するというものだ。

そして今の青年の耐性は、「火炎反射」「氷結反射」「電撃反射」「衝撃反射」「物理反射」という、およそ並みの相手なら傷一つ負う事もなく完封して余りあるほどの凄まじいものだった。

だが現実はどうだ。

現に彼はあの赤い男が放った火球を反射してみせたが、無傷というには看過できないほどの消耗を負っているのだから。

(……まあ、当然かな)

如何に青年——異界において「混沌王」と称される、大いなる闇の最高傑作であろうとも、世界一つ軽く焼き潰せるだろう魔力の塊が相手では分が悪かった。

あの男が放ったのは、炎であって炎ではない。それに込められた魔力量が大きく、そして多すぎたがために火という概念そのものすら歪められたまさに獄炎。

(メギドラオン……みたいなものかな)

青年の脳裏によぎったのは、あらゆる耐性をも貫き破壊する破滅の光——彼の世界において「万能属性魔法」と称される系統の最高位魔法の名前。

仮にも火炎属性であること、そして不動の体勢から食いしばったとは言え、よくそんなものを撥ね返せたものだど軽く苦笑しながらも——その視線の先はそれを見据える。

それは未だに破壊の余波で軋み上げる空間の中心部。

あの赤い男が居た場所だ。

なにも存在していない。いや、存在できるはずのない別次元の熱量の最中であって——青年は確信していた。

(まだ、終わっていない……！)

その予感ハ的中する。

物語としての当然の帰結として。

思わず舌打ちをする青年。

碌なダメージには成っていないだろうとは思っていたが、ここま
で無傷かつ傲岸不遜、更に意味不明な台詞つきというおまけまで付
いてくると、もはやイラつきを通り越して逆に頭が冷えるというも
のだ。

「ふん……なんだ随分と冷静だな？　ここで激昂して突っかって
来るならやりやすいものなのだがなあ」

「……………」

「答える気はないか？　だが、正直なところ我も驚いているのだぞ。
魔法の反射など我の世界にはなかった能力だからな。」

「が、所詮そこまでだ。宇宙最強たる我にとっては微々たる問題で
しかない！　ふははははははは！！」

またそれか——再び高笑いを始める「自称」宇宙最強。

どこまでも相手を舐めた口調だ。それで油断の一つでもしてくれ
てればまだやり様があったのだろうが、先の反射が多少なりとも男
からそれを奪ってしまったようだ……悪い意味で。

ここまで虚仮にされて、事実彼我の实力は天地ほどの差ほども空
いていることに思わず奥歯をぎしりと鳴らす。

だから……ああ、だからか。

「……何故だ？」

「——うむ？」

だからこそ、男の真意を聞きたいと思ってしまったのか。

「何故、貴様は「混沌」などに手を貸している？」

それを聞いただしていた。

青年と、そして青年の世界——そして、それ以外の世界の全てを巻き込むこの「大戦」の元凶になぜ手を貸しているのかと云う疑問を。

「……………」

「……………」

時間にしてわずか十秒足らず。

しかし、対峙する青年からすればその倍以上には感じられる時間。
その沈黙。

男は再び口を開いた。

「……ふん。 宇宙最強ともなると、満足に闘える相手もない。
ヒマでヒマで仕様がなないのだ。」

かつて数多の宇宙を巡り歩いた。数多の強者と闘った。その結果がこれだ——我は生きている。そしてより強くなっている。

ああそうだ……飽いているのだ……餓えているのだ——我は……！！

だから奴と契約した。奴に協力するかわりに、我が満足できるほどの強者と自由に戦ってもいいという契約をな——！！」

第一印象と何一つ変わらない傲岸不遜な態度。
だが、その表情になにか——影のようなものが一瞬過ぎったのは、青年の気のせいであろうか……。

「——少しばかり話し過ぎたか……中々愉快的時間だったが、そろそろ終わりとするか」

(……くるっ！！！)

そう思った瞬間には全てが逆転していた。
視界的な意味でも、戦況的な意味でも。その両方だ。

「——！！？」

刹那思考の麻痺。

何が起きたのか、それを理解した時怖気が走ったのを青年は知った。

何が起きたのか——それは、ただ殴っただけだ。

ただし、それは光速の速さによる一撃だという事が、その驚異を指し示す。

もはやただただ「絶大」だとしか表現できないほどの魔力を身に纏ったまま、生身で物理法則を超越した驚異的スピードで青年に迫る。

殴り、殴り、殴り、殴り、ひたすらに殴り続ける。

「物理反射」など知った事かと言わんばかりに……事実、青年のその防御耐性は碌な効果を發揮していない。

彼の拳の一撃一撃が「万能属性」に当てはまるほどの魔力が込められたものだから……などというどうでもいい事実は、全くどうしようもないほどに青年には意味がない。

「宇宙最強という言葉の意味……とくと味わうがいい——

——「オメガドライブ」っ！……！」

「がっあああああああああああ……！！！！？」

究極の疾走——まさにその一言に集約されるその猛攻。

必死に食いしぼり、削られながらも、それでも青年がまだその生を繋ぎとめているのは奇跡に近いだろう。

その猛攻が最後の一撃の締めをもって終わりを告げ、青年がその場に立っているのはまさに奇跡。

しかし、その実はただの意地であり、やせ我慢と言ったところであるのだが。

それは一言で言えばまさに意地。

負けられない、このままでは死ねないという……生への渴望。

しかし後が無いのもまた事実。

だからこそ、青年は己が持ち得る最強最高の、そして最も信頼する技に全てを掛ける。

「——コオオオオヲヲヲヲヲヲヲヲ……」

全身の入れ墨に魔力の灯火が光る。

青白くすら思える深緑の魔力光。

自身に残された全ての体力と魔力をこの一撃に。

それ以外の事は一切合財考えないという、捨て身の最終撃。

「ハッ！ 光線技か……粹ではないか！ ならば我も相應しい技で受けてたとうではないか！！」

なにか男の琴線にでも引っかかるものでもあったのか、その表情は活き活きとしている。

もつともそれは————相手も同じであるのだが。

「そんな……!？」

一度放たれば必ず相手を滅ぼすはず——その魔弾はしかし、未だ放たれることのない極大極限の魔力の昂ぶりの前に防がれていた。

「面白いものだな————違う世界の技でありながら、似た性質のものが存在し、それがこの場でぶつかり合うと言つのは!! ならばああ——!!」

性質も属性も似すぎているほどに共通点のある技だ。

ならば——より強大な力を有するものの前に屈服するのが当然の道理。

今か今かと解き放たれる時を待ち望むその一撃もまた至高の魔弾なのだから。

だからこそ、あえて違う点を上げるならば——それがもたらす破壊の規模と、なによりそれに与えられた「名」か。

「ゼタアアアアアアツ………ビイイイイイインム——
ツツツ!……!」

宇宙最強を自称する男が、自らの名を与えた技ならばそれもまた宇宙最強——！

ただただ閃光。

閃光がもたらすのもまた閃光。

! ! ! ! !

青年の最強の技など、それこそ路傍の石ころ以下の扱い。ただ光の大氾濫に飲み込まれるだけのちっぽけなもの。

青年はその最後、声という声すら呑み込まれ……混沌の宇宙の彼方へと放逐されていく。

「ふはははははははははは！！！！完っ全っ勝っ利っ——！！！！」

我こそ——宇宙最強！！——宇宙最強の魔王——ゼタなり

声を大にして上げるは宇宙最強たる己の名を掲げる勝ち名乗り。

異界最強の戦士の一人「混沌王」人修羅の物語は、赤き大魔王の歡喜の高笑いを幕引きとして、ここで終わった。

「これにて最強の悪魔「混沌王」はご退場」ふふ、光線VS光線だなんてゼタ王も中々分ってるじゃないか。やっぱりこういう舞台に光線技の演出は必要不可欠だと僕は思っただよ」

「……そういうものなの？」

それにしても——彼らも可哀想だね。どれほど超越の極みに達して神域にまで至った魂でも、此処では誰一人生き残れない。何故なら此処は、そういう風に創られた世界だから」

何故ならば——

「此処は「混沌の庭」——あらゆる世界を俯瞰し眺める意地の悪い神サマの世界だから。

この世界ではあらゆる不条理もまかり通り、道理が簡単に覆される悪夢の領域」

「ふふ、人聞きの悪い事を言わないでくれよ。彼らにだって勝機はあるさ——僕の創った世界に打ち勝つくらい強大な「うねり」

でも引き起こされたら幾らなんでも壊れてしまっ」

「でもそこで終わらないでしょ？」

この世界はあくまで貴女の被造物。壊されたところでまた創りだせばいい——この世界の「座」である貴女を倒さない限りは永劫戦い続けても決して終わらない」

ひとしきり言いたい事は言ったのか、翼の少女は紅茶を一口。

「邪魔者はこれで大分一掃出来たかな？ 「円環の理」や「因果律の番人」、「光の巨人」たちはもう邪魔しに來ないかな？」

「心配性だねえ……なあに、例え「旧神」が束になってきても僕の宇宙は決して壊せない。そういう風に創ってあるんだからねえ。」

まあ「大いなる闇」が何かしようとはしているようだけどね……それも徒労さ」

なにせ物語の幕はもうとつくに開いているんだから。

にまり——と、美女の顔に似つかわしくない、あるいは逆にとても相応しい顔で笑みを浮かべる。

「闇黒の叡智に、零にして靈なる王」

これにて、閑話は終わる。

だが望まれるのなら、まだまだ続くだろう。

良い意味でも、悪い意味でも。

それが混沌というものなのだから。

閑話「混沌の宇宙／人なる修羅と宇宙最強」(後書き)

ところで神咒神威神楽、皆さんクリアしましたかね？
自分は徹夜でクリアしました。

なんつーかあれだ……マリイに幸せあれ。
あと波洵はマジ塵。

第三章「1945年・死都ベルリン」(前書き)

今回からDiesに突入します。

クロウは元ネタ的に諜報機関に居ないとね(あ)

第三章「1945年・死都ベルリン」

燃える。

燃える。

燃えている。

全てが燃えている。

街も、人も、動物も、機械も——生きとし生けるもの、生きておらずともそこにある物、全てが等しく壊され砕かれ燃えていく。

響き渡る悲鳴、銃声、爆音は苛烈なる狂騒歌を紡ぐ楽器だ。

この街に存在するもの一切焼き滅ぼさんとする圧倒的戦火。死の
坩堝。

戦場という名の屠殺場。

1945年、5月1日——ドイツ、ベルリン。

第二次世界大戦、その最終局面においてこの街はまさに死都であった。

圧倒的物量によって、帝都はまさに陥落寸前。

響く銃声がまた一人の兵士を殺す。

轟く撃音が十人もの兵士を纏めて殺す。

目も眩む爆炎が街を都市区画ごと炎嵐へと包み込む。

空前絶後の総力戦……否、殲滅戦の体を要するほどに。

情け容赦などない。

世界の敵を根絶やしに——ただ大義のために容易く生命は刈り取られていく。

老若男女の区別なく——塵殺される。

これは人類史における最も苛烈で凄惨で、そして人の残虐性を露わにした戦争。

生命の価値など糞山の糞以下にまで墮落させられた時代の終わり。

そして——黄金の獣と水銀の王の成す、超越の物語を紡ぐ始まりの場所だ。

「はっ……はあ、ぐ……はあっ……！」

男が戦火に燃えるベルリンの一区画をひた走る。
その男は逃げ惑っていた。

既に手に持った小火器に弾は残っておらず、武器として使えるものは精々が銃剣と己の手足程度。
その目は燃える惨禍に正気でいられず、かと言って狂気に浸っているわけではなかった。

「……だ……やだ……！」

身に纏う軍服など等に擦り切れ煤だらけ。
服としての最低限の機能しか果てしないように思われる。
手足は指の末端まで血だらけで、走る体力すら付き果てる寸前。

「だ……やだ……やだ…………！」

そんな死体も同然の肉体を突き動かすものはただ一つの衝動。
俺はこんな所で死にたくないという想い。

「やだ……いやだ……嫌だ！ 死にたくない、死にたくない……！」

それはこの戦場においては、ある意味異質であった。
生物としては正常なのだろうが、全てを熱狂の渦へと巻き込むこの戦乱の最中であつて、確かにこの時男は異端であり異常でしかない。

既に共に戦つてきた仲間たちは死んでしまった。
誰も彼もが戦場の熱に焦がされたように、こぞつて死んでいった。
男にはそれが信じられない。
例えばかつて仲間だった男たちであっても、彼は仲間たちのそんな思考が信じられなかったし、信じたくもなかった。

これは戦争だぞ——同僚だった酒飲み男が、毎度の如くへたれる己を叱咤する光景が目に見えた。

余計な事は考えるな——厳しくも気前のいい上官が、戦争の恐ろしさに竦む己を冷静に諭す姿を思い出す。

ただぶつ殺し、ぶつ殺し、ぶつ殺して、ぶつ殺せ。

狂気だ。狂気の連鎖だ。

一つの戦場を抜ける度に仲間たちは狂っていく。この戦場の熱に浮かされていく。

そんな姿を見るのが、何よりも嫌で怖ろしくて、自分もそんな風になつていくのを想像するたびに怖気が走った。

「ひゅ……、ゅ——……！」

もはや荒げるための息すらも絶えて足を運ぶ。
ただただ怖ろしくて、この死地から逃れたくて必死に、必死に。

確定した死と逃れられない敗北。
壊れていく仲間たちの顔を見るのが怖くて。

だからだろう——自分一人だけがこうして生き残っていた。
気付けば上官も同僚も部下たちも、皆が皆死んでしまった。
だから、逃げた。

（すまない……すまない……！）

心底からの悔恨の声。
だが足は止まらないし止められない。

市街地を抜けるにはまだ遠いが、それでもまだ中央部付近よりは
ましだ。

耳を澄ませばきつと聴こえてくる——あの銃声と爆音と阿鼻
叫喚の音が。

「……………つ……！！！」

走れ、走れ、走れ、走れ。
走って走って、走り抜け。

あと少しだ——この区画を抜ければ少なくとも状況はまだマ
シになる。

生きてやる、生き延びてやる——！！

そうして、必死の思いで逃げ回ったその先に――、

「――あ？」

「おんやあ？」

――最悪の悪魔が居た。

その男は、一見するととても軍属の人間とはとても思えない人間だった。

表情こそ一見柔和だが、その目は鋭く細められ、口元は三日月のように意味深な笑みで歪められている。

親衛隊一（SS）に配布される軍服をこそ身に纏ってはいるものの、その着こなしはとても雑であり、己にこんなものは似つかわしくないのだと恰好で示しているようだ。

「おつかいですねえ……兵隊さん方はまだ中央部や各区画での守備任務にあたってるはずなんです……なんているんです？」

「あ、それは……」

答えられない。

当然だ。答えられるはずがない。

敵前逃亡——まして帝都防衛の任務からのそれだ。
敗北主義者と罵られ銃殺刑——否、今まさにこの場で殺されても可笑しくはない。

何よりも——彼は気付いてしまった。

それなりに長い軍歴から癖になってしまった、それとなく相手の所属と階級を確認する癖。

男の階級は大尉。

だが階級に記される舞台章、それが問題だった。彼は、目の前の男の軍属を、その所属を確認してしまった。

「うあ、あ……SD？　なんで、なんでこんな……」

「なんでこんな所にと言いたいのですか？　ああ、そりゃあれですよ……貴方の運が悪かったと言いますか、別に貴方一人をどうこうするためにここに居る訳じゃありません。ただの偶然ですよ、ええ」

偶然偶然——と笑いながら、しかしその実笑ってなどいない男の所属——「SD（ジッヒャーハイツディーンスト）」

ナチス党内に置かれた組織であり、その詳細は不明。
国家に公認された情報機関であり、ゲシュタポと並び党内の保安を担任する機関だ。

対外的——（内に対してもか）に情報分析機関として公表されてはいるが、その実ゲシュタポを執行機関として党内の敵を探し出し排斥するための人間たちの集まり。

男にとっての、この場における死神。

「あ、大尉、殿……おれ、いえ私は……！」

「あーあーいいですいいです。聞きたくありませんし、聞かなくても分ります」

彼が何か言い訳のように言葉を搜す中、男は手をぶらぶらと振りながらその声を遮った。

「どうせあれでしょ？ 逃げて来たんでしょう？ いるですよねえそんな人間。

や、別にそれが悪いことだとは思いませんよ。あくまで個人的意見ですがねえ……死にたくないって思うのは生命に平等に与えられて権利って奴です。私がどうこう言つつもりなんてありませんよ」

「……………」

あつさりと。

それが至極当然のように彼は自分の心意を見透かされて、しかし同時に希望を持った。

このまま逃げられるかもしれない、と。

「まあ大体の人たちは、この敗北主義者が！ とか言いかねませんけどねえ。むしろ私の感覚としてはなんで貴方方逃げないんですって感じですよ？」

国家のため？ 忠誠？ はっ……詭弁ですよねえ。人間誰しも自分が一番大切でしょうに？ 誰も彼もが皆皆この戦火に酔ってるんでしょうかねえ？ まったく……くだらない」

「た、大尉殿……質問を、質問をしてよろしいでしょうか？」

「はいはい？ なんです？」

だからだろう。

もしかしたら——なんて希望を持ってしまったが為に、この男に質問をしてしまったのは。

「大尉殿はこの戦争に、この結末に反対……いえ、嫌悪しておるのです？」

にやり——と、男は口元を更に歪める。

それを見て思わず蛇のようだと思ったことは、きつと間違いではないのだろう。

「嫌悪……嫌悪ねえ。ああ確かに、これは戦争反対って気持ちよりも、嫌悪という言葉こそが相応しいでしょう。ただただ狂ったように殺し殺されるだけの「死の踊り」。

そんなもの、とても素直に受け止める気持ちにはなれませんねえ私は」

「で、でしたら……！」

「ええ、ええ。君のやっている事は確かに軍規に基づいたらとても

褒められることじゃありませんが、人間としてなら咎められる云われなんて無いですねえ。

だから君の行いは最もだ。ああ、最も人間らしい。今のこの戦場にあつて、このベルリンにあつて、君ほどに人間らしい男はまさしく君くらいでしょう！」

どこか他人を馬鹿にしているような口調ではあつたものの、その口から吐かれる言葉は肯定の意だつた。

その言葉は、逃げたことへの罪悪感や多くの仲間たちを見捨てたという罪の意識を和らげていく。

俺はこのまま助かるかもしれない——そんな淡い期待は、しかし次に吐かれた男の台詞によつて凍りついた。

「ああ——ですからご安心なさい。私が君をどうしようなんて思いません。」

まあ最も——「素直に死んだ方がまだマシだつた」とは思つかもしれませんがねえ」

「——え」

「くは……くふ、くははは！！」

笑いが零れる。笑い……いや嗤いか。

凍りつく自分を嗤っているのではない。この戦場で今も踊り狂う死者の群れを冒瀆する邪悪な性。

魔性の笑み。

「いやはやまつたく！　ただの職業軍人として機械の如く冷徹に、それでいて熱狂の渦に浸れたらどれだけマシだったのか……人間として真つ当であり続けてしまう君のその正気――（狂気）さ具合には脱帽ものだ！　くひやははははは――！！」

「あ……ああ……」

凍りつく。動けない。

蛇に睨まれた――睨まれてもいないのに、動けない。体が、肉体が、魂が竦む。

この男の言葉から耳が離せない。

「く、ひひひ……！　まあ、そう怖がらずに。怖がらせたのは私ですがねえ、しかし本当の恐怖つてのは此処から始まるんですよ？

赤騎士や黒騎士、ましてや白騎士なんぞに見つからずにすんで良かったですねえ？　彼らならば君の生きるという渴望なんぞ容易く掻き消してしまうに違いない。なら、私に会えたのはまだしも幸福だ！

君には是非とも生きてもらいたいから！」

なぜなら――歴史の生きた証人として、地獄の顕現を見た男として！

男は嘲笑し続ける。

そして変貌は続く、今度はより明確に明瞭に、まさしく異常事態

として。

その声は遠く、どこか遠くから魔法―（魔砲）の如くに響き渡った。

『総員傾注！ 我らが主、偉大なる破壊（ハガル）の君の御前である。そのお言葉、黙し、活目して拝聴せよ！』

忘我という言葉があるが、恐らく誰もがこの声を聞き、その状態に陥っただろう。

ただ一人、嗤い狂う蛇に恐怖する自分以外は。

「聞いてたろう？ さあ、しっかりと見ておいってくださいよ？
地獄の主、愛すべからざる光、輝く黄金の獣殿のご登場だ。絵になるぜえ、この光景は？」

「……………！」

促されるように、彼は燃えるベルリンの天（ヒンネム）へと。
戦火と鮮血に彩られたその空を見上げる。

そこに、千年王国の夢の終わりを告げるかのように、輝く黄金の光が降臨していた。

全てを見降ろす王者の瞳、たなびく獣の鬣の如き髪。

この世のなにより鮮烈で苛烈で、荘厳で美しきそれは、おぞましき黄金。

人の世にあらざる魔性の存在。

そんな黄金の傍らに待るのは、影絵のような男。

輪郭も曖昧なその男は、まるで青年のようっていて老人のようでもある。ありていに言って地味であり、隠者のようで頼りない印象。

対照的なその二人は、しかしこの場、この時にあって総べての存在を凌駕する真正の魔人。他を圧する巨大な方陣を背にしながら、それすらただの背景にしてしまう怪物の中の怪物。

獣が口を開く。

世界全てを睥睨するかのように。

「卿ら——己の一生が全て定められていたとしたら、何とする」

ただ、その声を聞いただけで彼の精神は砕け散る。

ぎりぎりで正気を保っていた精神の均衡など容易く壊された。

それでもなお、黄金の男の声は、強制的な響きを持って精神に染みわたる。

その陰々滅々としたその男の声は、恐らくベルリン全土、その場に居る全市民に届いていることだろう。

忌むべき光の君曰く——永劫、卿らは敗北者としてあり続ける運命。定められた道をただひた歩き、そして回帰する永劫に。

勝者は勝者に、敗者は敗者に。それが世界の仕組みだと。

死すらも解放ではなく、ただ卿ら悪魔の徒として、世界の敵として永劫に。一片の罪咎無しにして、ただ犯され、奪われ、踏みにじられ続けるのだと。

終わりになく、卿らの始まりはまた犯され、奪われ、踏みにじられる。敗北者としての始まりだ。

ゆえに終わらず、無限に苦しみ、無限に奪われ続けるだろう。

それを覆したくはないのか——と。

「ああ……………」

思うならば、戦え。

不遇の運命を覆したくば、敗北者の汚名を雪ぎたいと願うならば

——その魂を差し出せ。

遥か高みからの、黄金の男の問いかけ。

気付けば、男の耳にははっきりと聞えていた。

ベルリンの至る場所から、その請願、嘆願の声が。

勝利を（ジークハイル）。

勝利を（ジークハイル）。

勝利を我らに与えてくれ（ジークハイル・ヴィクトーリア）。

そして黄金の獣はそれを、承諾した。

「ならば我が軍団（レギオン）に加わるがいい」

「ひいつ……………」

決定的なその言葉。それを切っ掛けとするように異変は加速する。銃持つ者はそれを己の口へ。

刃物持つ者はそれを胸へ。

何も持たぬ者は火の中へと。

撃ち、刺し、飛び込み、自殺する。

地獄と云うものがあるのなら、これがそうだ。

先のベルリンの戦場など、これに比べれば何百倍、何千倍はマシな事か。

（狂ってる狂ってる狂ってる狂ってる………なんで俺は狂えない！？）

それでも狂えない。

この熱狂の渦に跳び込めない。

見えざる手が己を引き留めるかのように、決してあの地獄へと渡らせない。

最後の最後まで、見続けるのが貴様の役目だと言う様に。

「あーあー………もったいない。魂こそが燃料である術式つてのも、私みたいな人間にとっちゃあもったいなくてしょうがない。

我らが長官殿も道化師も、少しは下々の趣味嗜好を知ったほうがよろしいと思うんですがねえ」

「あ、ああ………たいい、大尉どの………」

己と同様にあの黄金の獣、魔性の君の声を等しく聞いていたはずの男は、しかしまるで先程と変わった様子はない。

誰も彼もが勝利を望み自害していく中で、最も正気を保っているようにその実、最も狂気に憑かれているのはこの男なのではと思う。

もったいないもったいない——そうばやく男の口調は心底残念そうだ。しかしその本音は生命の尊厳だとかそんな御大層な理由ではないだろう。

あえて近い表現を捜すなら……まるで子供がお気に入り玩具を取り上げられているような、そんな心象を与えてくる。

「大尉殿……どうか、どうかお願いです……俺を、俺を殺して……！」

「——はあ？」

耐えられない、この地獄に正気で居続けることが耐えられない。いつそのこと殺して欲しい。

いや、殺して、殺して欲しいのだ。

どうかお願いだから殺してくれ——！　だが、その願いは容易く一蹴された。

「嫌ですねえ。言ったじゃないですか、貴方は生き延びるんですよ？　良かったですね——仲間を友をそして故郷を生贄にして君だけはこのまま生き残る……愉快ですねえ。」

どんな気分ですか？　生きたいと、逃げ延びたいと願ったのは君ですからねえ、きつとその心は晴れ晴れしいでしょう。やったぞ俺は生き残れるんだ！　……って感じですか？　く、くひゃっはっははは——！」

「ああ……ああ……ああああ……！！！」

[illegible]

「あああああああああああああああああああああああ
ああああ - - - - - ! ! ! ! !」

生の渴望はとうに絶えて、死を懇願する彼の願いは一笑に伏される。

相反する二つの声の響きが虚しく戦火の空へと木霊した。

この日――世界を敵に戦い続けた髑髏の帝国は崩壊した。帝都ベルリンにおける無数の死を歴史に刻み込んで、たった一人の生還者を残して。

これより先、天寿が尽きるその時まで、自ら望んで死ぬことも出来ずに、彼のその死よりも辛い生が始まるのだ。

そして舞台は六十一年後——2006年、極東の果て。日本より物語は紡がれることとなる。

第四章「夢・黄昏・水銀」（前書き）

マリイってこんなだったか？

D i e s をもう一度やりなおしながらの投稿。

第四章「夢・黄昏・水銀」

「――、――」

夢を見ている。

俺は今、夢を見ているのだ。

それはとても遠い昔のことのようで、しかし最近あった事のように思えた。

己は今歩いているのだろうか。しかし感じるのは浮遊感だ。

地に足が着かないひどく不安定な感覚。

気持ちが悪い。

まるで空から落ちる小鳥のような、あるいは水底で溺れる魚のような気分だ。

「――　かか」

自分でも何を言っているのやら意味がわからない。思わず笑ってしまった。

まあ夢だからしょうがないだろう。

夢とは元来そうしたものなのだから。

何一つ、自身思ったことが実行出来ない……そんな不自由さと理不尽さがこの身を包み込んでいる。

此処は一言で言えば虹色の回廊。

狂った色彩と狂った角度が視界を圧迫する。

この空間を埋め尽くし支配するのは、過去現在未来あらゆる世界に存在する時間という概念を象徴するもの。千や万などとうに超越――それらが散逸している。

「……………」

チクタクチクタク——規則正しく秒針が時を刻む音が聞こえてくる。

ジリジリジリと、どこからか電子時計の機械音が慌ただしく鳴り響いてくる。

ボーン……ボーン……と柱時計の鐘の音が空間に満ちている。

一つ一つは耳障りにもならない程度の、型にはまった音たちも、それが数千数万数億を越す数ともなるとそれは轟音と化す。

一つ鳴り終わればまた別の時計が鳴り響く。

不協和音。

永劫鳴り止むことの無い世界刻む音たち——劫音とでも言うのか。

歩いているという感覚すら掴めないまま、しかし足だけは只管に前へ。

終わりのないゴール……あるいはスタート地点を目指しているのだと、思考定まらないながらも理解していた。

歩いて歩いて歩き続けて、その内に実は一步も前に踏み出していないことに気がつく。

そもそも、「肉体」なんてもの元々、自分には無かったのだと思いき出してしまった。

「——ああ」

自覚からの覚醒は早い。

この世界——狂った時間と空間の神座では、精神・意思・魂

の強さと指向性のみが優先される。

理解してしまえば出るのは簡単なのだ。

自分もまた本来はこれの「同類」なのだから。

ああ、見えているぞ。そこに居るな。

無限に散逸する時計の群れの奥底に、彼の者は居た。

薄汚れた襤褸切れのようなローブに身を包んだ、男とも女とも、子供とも老人とも似つかぬ人型。

あくまで人型だ。彼一（あくまで表現でしかないが）に姿形などあつて意味がないものだ。

この神座の主たる「■■■■」の眷属にしてその化身の一。

彼は最初から自分が辿り着く事が予定調和の内であるかのように自然に振舞い、そして外界一切からの接触を拒むと言わんばかりのローブを静かにずらす。

中には何も存在していない。

より正確にはまだ存在していないだけ。

「■■■■」が認識すれば時空という概念のある場所ない場所の理すら超えて繋がる「穴」あるいは「門」が現出する。

しかし、理屈などこの際どうでもいい。即ち——そこが出口なのだから。

だから彼の穴を潜って此处から抜け出そう。

「……………此处は？」

そうして——ふと気がつけば浜辺にいた。

儚くも脆くそして朧気で、しかし何もかもを包み込むような優しい色を湛えた美しき黄昏。

何処にでもありそうな風景で、しかしどこにも無いのかもしれない光景。

それはただただ美しいとしか言いようがなく——とても不愉快だった。

彼の英雄たちとの最後の戦を思い出してしまうから。

実に胸糞が悪い……まあ、ただの八つ当たりでしかないのだが。ただ単に自分は——クロウ・クルーワツハは己が負けた時の事を思い出させるこの光景が嫌いなだけなのだ。

「——誰？」

「——あん？」

だから「彼女」の存在に気づけなかった……と言うのもただの言い訳だろうか。

苦虫を噛み潰したような心持ちで海を見ていたが、どうやら自分は一人ではなかったようだ。

「——ああ、すみませんねお嬢さん（フロイライン）。私としたことが、先客に気づかなかったとは……それもこんなに可憐なお嬢さんの存在に！」

「……………」

「……………あー、お嬢さん？」

どうにもいけない——まあ第一印象の段階で思わずガン飛ばしなんてしたらそんなものだろう。

しかし何だ、怯えているとか臆しているとか、そんな印象をどうにもこの少女には抱けない。

無垢という表現が一番近いのだろうか——こちらの言葉の意味を理解しているのかも怪しいものだ。

歳はまあ十代ではあろう。

少女と言うより女性、しかしもつと幼いようにも思える。

容姿はそれこそ十人が十人、愛らしいとか可憐なと表現することだろう。綺麗——と言う人間は少ないかもしれない。

悪い意味ではなく、この少女には綺麗よりやはり先の可愛らしいという言葉のほうが似つかわしく思えたから。

この黄昏に勝るとも劣らないブロンドの髪と翠玉のような瞳は美しく。

服とも呼べるか分からない白無垢を身に纏うその姿は、陳腐な表現でこそあるもののひどく幻想的だった。

「はてさて……」

「……………」

まあなんだ、こういう人間は正直苦手だ。

自分は人を欺き騙し騙るのが生き甲斐と言っているが——子供相手にはあまり意味がない。なにより大人気ない。

まあ騙そうと思えば非常に容易いかもしれない。

他人の言葉を疑う——そんな感性があるのか怪しく思える、

そんな危うさが彼女には存在していた。

「……ま、いいでしょう。それはそれで面白い」

たまにはこういうのもいいだろう。

騙し疲れなんてものあるのか知らないし、あっても自分にそえが適合するとも思えないが、ああ悪くない。

馬鹿ども相手にするよりは、まだ子供相手にしていたほうが楽しい。

しかしどうしたものか——正直、いまがどのような状況で此処がどこなのか……それだけでも情報を得たいものだが。

はつきり言つて、目の前の少女からまともな情報が引き出せるような気がしない。少女よりも幼子といつても良さそうなものだ。

そんな少女の口からまともな言葉を引き出すには——

「ところで——貴女のお名前はなんとおっしゃるのでお嬢さん？」

「わたし、——？」

「いや——やはり私から名乗りましょう。女性に先に名乗らせては紳士の名折れですからねえ……まあ紳士を語った憶えはありませんが」

「……？」

「私はクロウ・クルーワツハ。とある国の諜報機関に所属しており

ます。

と、いやいや自分で謀報員ですと言い触らすのは悪い癖ですかねえ。だとしてもお嬢さん相手に嘘を吐くのもなにやら罪悪感が湧いてきてしましまして、とはいえ職務ですからねえこれ以上はお話できない。……ああ、全くこの身が恨めしい限りだ！……どうか許して頂けないだろうかお嬢さん！」

「え？ え？」

実に意味のないことを一気に捲くし立てる。

少女は呆けた顔で状況に対応できていないようだ。まあ、そういう風に話しているのだから当然だ。

相手がこちらの話を聞いてようが聞いていまいが関係ない。

自分は何時ものように、こちらのペースで語るだけだ。その上で、少女に語らせるとしよう。

「しかし、しかしだ——もし許しを頂けるのならば、我が心は至福の時を得られるだろう。

なぜか……？ それは貴女のような可憐な女性に私という一人の男が認められた証となるからだ……ああ、それはなんと心地のよいものであるうか！」

「あの……」

「だからこそ、だからこそ何も語ることの出来ない非才たる私をお許し頂きたい。

そしてもし、許しを頂けたのならば、是非とも貴女の口からその名をお尋ねしたい。如何でしょうか美しき君よ？」

「え……あ、わたし……わたしの名前は——マルグリット」

楽勝だなこの娘——などとは口が裂けても言うまいが、しかし実に簡単だ。

先ほどまで胡乱であり、何処とも知れない彼方を見ているような雰囲気であつた少女——マルグリットは、意識をこちらへと傾けた。

「ああ感謝を、感謝しますよマルグリット嬢。では——あらためて、お見知りおきを願ひましょう」

実の無い感謝の意を言葉にする。

これで多少は話もし易くなるうと——気障つたらしくも紳士振り、少女のその白魚の如き手を取り、甲に口付けを——

「——」

「——だめ！」

パシン——手を、払い除けられた。
私に触らないでという拒絶の意思表示。

「おっと……」

「あ……」

驚いた。

いや、先ほどまで胡乱だとか何処を見ているのか分からないとか……散々な表現と評価を下した少女だが、譲れない一線にでも触れたのか、今こうしてはつきりと自己を表現した。

気に障ったというわけではないのだろう、どこか申し訳なさそうな顔でこちらを見つめている。

「あの……ごめんなさい」

「いえいえ、特に気にしちやいませんよ」

これは事実だ。

女子供の抵抗なんぞでいちいち突っ掛かるほど餓鬼ではない。

なにより、演技とはいえ紳士振って接していた手前、あまりそれに対して何事か言うのも如何なものか。

なにより――

「ああ――謝るのは私のほうでしょう。なにか貴女の気に障ることをしただろうか……であるなら謝罪したい。いやさ、させてくれたまえよ」

「あ……ちが、わたし……」

「さあ、何が気に障ったのか……話してくださいよ」

なによりだ――違和感があった。

彼女に触る一瞬前、彼女に拒絶されるその刹那……「触るな」という危険を知らせる知らせを聞いた気がしたのだ。

その時だった。

「——申し訳ないが、彼女を苛めるのはそこまでにはもらえないかね」

その男が現れたのは——

「——！」

「カリオストロ！」

「ああ——いけないなマルグリット。知らない人とは勝手に話したりしてはいけないよ。もしかしたらとんでもない「悪人」なのかもしれないのだから」

「……ごめんなさい」

男と少女とのやり取りなど、気も留めない。

留める云々以前に、それ以上に驚愕すべき事柄が生まれていた。

気づかなかった。

気づけなかった——この俺が？

少女の時とは明らかに違う。

正真正銘——自らのそれなりに鋭敏だと自覚している、その意識の片隅に欠片も引つかかることなく、その男は今この瞬間にこの世界に現れた。

異常な事態であり、それを成した男もまた異常である。

それには、まず「人間性」と言うものがそれには無かった。

正確には薄いと言ふべきだが、極限まで薄れたそれはもはや無いに等しい。

数多の人間を騙し欺いてきたクロウ・クルーワツハであるからこそ理解できる。これは、人間とは違う別の領域の何かである、と。

これを例えるなら枯れ果てた古木か枯渇し切った大地か——
どちらにせよ、人間以外で例える他ないだろう。

しかし、

「ああマルグリット、君はあまりにも俗世間から隔絶して社交性というものが無い。だからこそ、怪しい人間とそうでない人間との区別がつかないのだろう。ゆえ、これは仕方のないことだとは十重に理解している。

理解しているからこそ……だからこそ約束してほしい。今度からは私以外の者と会う時は、よく見極めてからにしてほしいと。それが君の為出という事は、理解できるねマルグリット？」

「……うん」

そのやり取りは極々普通の、なんとも人間味のある光景である。
それが更に異常極まる——何なのだコレは、と。

「あー失礼ですが、貴方は彼女の保護者か何かで？ 確かに彼女にちと無理に迫っていたのは本当のことですがね、しかし……横から急にしゃしゃり出て来て人様のことを怪しい人間呼ばわりとは……

ちいとはっかし頭に来るんですね」

普通に話しが出来るのなら、なんとかなるだろう。

先の少女とのやり取り同様に手玉に取る事だって可能なはず――

――とは欠片も思えない。

如何に人間らしく振る舞ってはいても、「無機物」のような生物相手に会話など狂人の思考だろう。

だからこそ男がこちらの問いに普通に返してきたのには驚いた。

「はて――私は何かおかしな事でも言っているかな？ 現実として、怪しいだろう。傍から見て先のマルグリットとのやり取りは実に三流役者の演技も同義。街のチンピラが紳士を気取り、言葉巧みに少女を誘いこもうとしているのと同様に実に怪しい人間そのものだ」

「……………」

「……怪しいの？」

「ああ怪しいね。とびきりに怪しい。此処は、この場所は「まだ」私と君以外に開かれてはいない世界だ。

まだ幕も開いていない舞台上上がるのは、役者としても観客としても、とても失礼なことだとは思わいかね「黒蛇（ニドヘッグル）」？」

「――てめえッ……………」

誰だ――と言わなかった。

言える筈がない。目の前の男を自分は知っているのだから。

「君の出番はこれから先、約束の地たる「あの街」にこそ存在する。君の居場所はまだ此処には存在していないのだ。

舞台上に勝手に上がり込み、かつ場面を違えた役者ほど惨めでみっともないものは無い。それこそ、道化の類でもなければ」

甦る。甦る。

徐々に記憶が鮮明になっていく。

既知だ——これを、この場面を己は知っている。この男の存在を己は知っている。

「コスかヒュプノスか、はたまた別の神格の仕業か——夢を繋げてこの場所までどのように辿り着いたのかは私も理解し難いが、「二度目」になるが、この黄昏にまだ君は呼ばれていなのだよ二度ヘッグル」

「ああ——そうかい」

むしろ忘れることなど出来ようか——と言つよりも何故に忘れていた？

夢か幻か現実なのか、その判別もついてはいないが、しかしこれの存在を忘れていたなど——然り然り……奴曰くとんだ道化だ。

ああ、思い出しているぞ。

思い出しているぞ貴様の事を。

魔人の集団集う魔窟の第二位の実力者にして、底も見通せぬ深淵

の如き智謀を宿した影法師のことを。

「メルクリウス——！！」

「ようやくお目覚めかな。仮にも黒円卓の第十位に座す者、真性の魔人たる君がここまでの無様、道化を晒すとは……六十一年の歳月は君に何を齎したのか」

この勿体ぶった喋り方。

どこまでも台本通りな言葉遣い。

監督気取りのうざったい化物。

「なんで此処にてめえがいる？」

「それはこちらの台詞だとも。言っただろう——此処にはまだ私とマルグリット以外存在し得ない……存在するはずがないのだよ。辿り着くべき予定調和は我が代行と、そして我が友以外に想定してはいないのだから」

「うち……なら質問を変える。今のこの状況は何だ？」

虹色の回廊を通り、この黄昏に辿りついたのは一体何時の話だ？
有り得ないことだが、そんなものは遠い昔にもう「体験済み」なのだ。

もはや通り過ぎた過去の話し。

この永劫回帰する世界で、最初に辿りついた時、この男に出会った時の記憶だ。

総じて今この時にあるべき事象ではない。

最初とは当然、演出も進行もなにもかも違うがしかし記憶にある光景とこの場所とは一致している。

唯一未知は少女マルグリットの存在だけだが、確かにこの場所であつて己はこの男に——メルクリウスに会っている。

「夢——と言つても余人が言うところの夢に非ず。夢と現実との狭間において、過去と現在とを強引に繋げているのだらう。

驚くべき事でもあるまいよ——君という存在は「あちら側」の存在にとても気に入られているようだ。彼らの物語において、この「二度目」の来訪は必然必要な場面ということなのだらう」

「——夢」

理解不能だ。

真実を言っているのは確かだが、言い回しが勿体ぶり過ぎて論点からずれている。

結論だけ述べるのに対して、間に余計な言葉を入れ過ぎているせいで実に面倒臭い。

「そう夢。その形態が一番描写としては書き易かつたのだらう——誰の脚本かは知らないが、随分と稚拙な手際だ。しかしゆえに「混沌」としている。

だが——夢である以上、終わる時は早いものだ」

「——ずッ」

瞬間、覚醒しかけた意識がまたも朦朧となる。鈍器で殴られたような、それでいて痛覚には響かない鈍痛が頭に広がる。

まるで泥沼に沈みこむように……いや違うか。

これからが覚醒の時なのだろう。目覚めが近いという事だ。

「……ぐう、まだ話しは終わっちゃいねんだよメルクリウス」

「生憎だが、私から語る事はなにも無いし、第一これに私は一切関わっていない。「彼ら」にとっては、この瞬間に君と私、そしてマルグリットが会っているのだという事象、それ自体が必要なだけであって、それ以外は求めていないのだろうから」

ゆえに――

「さあ戻りたまえよニドヘッグル。もうすぐ覚醒の時間だ。なにやら「外」からの干渉のせいで妙な事態にはなっているが――あ、あれもまた法則を脱するための良い材料となるだろう。」

君という異分子の紛れたこの物語で、君が何をするのか……舞台袖から見学させてもらおうとしよう。では、君に健やかなる未知が訪れんことを切に願うよ――」

「畜生が――！」

加速する夢幻感覚。

奈落に落ち逝く思考の麻痺。

薄れる視界に水銀の影法師を映し取りながら悪態を吐く。

「また……来てね」

最後に、少女のそんな言葉が聴こえた。

「——て……さい」

声が聴こえた。

居心地の悪いまどろみの淵で、己を呼ぶ声がする。

「——もうすぐ……ですから——きてください」

けして激しくなく、こちらの覚醒を促す声。

この感覚は久しく味わうが、思ったよりも悪くはない。

先程までの不快感、夢の中での出来事も記憶の片隅へと忘却していく。

「——起きてください」

最後にどこの誰かも知らない少女の事の言葉を思い出して——

——ゆっくりと瞼を開く。

開いて最初に見た光景は——

「ああ……やっと起きましたか大尉」

「……………」

「実に居心地が良さそうに眠っていらっしやったのですがね、もうすぐ日本ですから起こしたのですが……」

目の前には貧相な小男が一人。

いまや懐かしき黒の軍服を纏った、どこか蜘蛛を思わせる印象の男。

ああ……この胸の内に広がる感覚はなんと表現したらよいのか。

「……同志シュピーネ」

「はい？」

「とりあえず——黙って殴られろや」

反論なんぞいらんから——この胸に広がる感覚。即ち夢の中の不愉快な出来事と共に、激情を拳に込めて目の前の小男にぶつけてやった。

「なぜつぶえ——！？」

第四章「夢・黄昏・水銀」（後書き）

シュピーネさんの立場はどうなるのか？
というか彼は果たして無事なのか（笑）

ところで、人物紹介というか、Dies風の紹介要りますかね？
大アルカナとかルーンとか聖遺物とか。

主人公設定（前書き）

本編ではなくて申し訳ない。

これって人物紹介か？ と聞かれると自信がない。
話しを進める毎に更新していく予定です。

これを書くにあたってRNAさんのを大分参考にさせて頂きました。
前書きにて感謝を。

修正・追加しました

主人公設定

氏名：クロウ・クルーワツハ

称号：嘲笑する虐殺蛇（ニドヘッグル）

黒円卓：第十位

ルーン：ブランク（無あるいは未知、愚者を指す）

大アルカナ：愚者

占星術：天王星

形態：特殊発現型（普通にしている分には武装具現型）

位階：創造（実際には流出位階に到達している）

聖遺物：????

解説

元ナチスドイツの諜報機関SD（ジツヒヤーハイツディーンスト）に所属していた諜報員。最終階級は大尉。

彼は本来この世界に存在するはずの無い異分子そのものである。

現世界の絶対法則「永劫回帰」に対して抵抗力を持っており、記憶を延々と継承したまま回帰を繰り返している。この法則は他者にとつては地獄の責め苦に等しいのだろうが、彼にとっては酷く馴染み深いものとなっている。

他者を欺き騙って嘲笑うことを何よりの生き甲斐としているが、騙すに値しない人間に対していたって普通の狂人である。

求道型の創造位階に到達しているが、実質的には流出位階であり、個そのものが一つの世界ともいうべき存在。彼の渴望はその実現を果たす為には必ず他者が必要となる為、霸道の性質も多少含まれている。

邪神に魅入られ永遠に弄ばれる運命にあるが、現段階ではそれ以上の詳しいことは不明である。

聖遺物

普段彼が己の聖遺物だと言い張り、そして他の団員の誰もがそうだ
と思い込んでいる二振りのナイフ。かつて神と崇められた龍神の牙
である。

「過去」に数十万単位の魂を取り込んでいるため、龍という概念属
性による神秘と合わせて非常に強固な代物。

彼本来の聖遺物とは、クロウ自身が最も信頼しているものに他なら
ない。

第五章「空の上で」（前書き）

今回は日常系です。日常？

ちらほら、クロス予定の作品に関わる単語が出てきます。

第五章「空の上で」

空の旅と聞くとなにをイメージするだろうか。

人によつて意見は分かれるだろうが、大体が未知の国への憧れや旅立ち、自由などを連想するだろう。

爽やかなあるいは鮮やかな、と表現してもいい。

「彼ら」が乗るそれ——現在、高度約一万メートル付近を飛行する「彼女」も、本来ならそういったイメージと共に多くの民間人を乗せるはずだったろう中型の旅客機であった。

しかし何の因果か、彼女が今その胴体に抱いている者たちはそういったイメージとは真逆に行く。

硝煙の臭いと戦火の気配を引き連れる魔人。

おおよそ禍なる事態しか引き起こさない最大級の害悪そのもの。

世界の敵たる魔人を乗せて、彼女の翼は極東の島国——日本へと向けられていた。

「あー……寝起きに不快なものを見たせいで気分が悪いですねえ」

眠りから覚めたクロウが最初に言った言葉がそれだった。

不愉快極まりないと、痛烈な言葉と共に言い放つ。

対して、それを言われているのはひよろつとした細身の体を黒の

軍服で包む、いかにも小心者・小物と言った言葉の似合う男。

「紅蜘蛛（ロート・シュピーネ）」と同志たる魔人たちからそう呼ばれる、聖槍十三騎士団・黒円卓が第十位代行者。

しかし今、その頬はほどよく腫れ上がり、殴られた痕がくつきりと残っていた。

「もうひふあへはりまへんたひひ……」

「はあ——？ 何を言ってるのかさっぱりですねえ。上官に対してそれはあんまりじゃないですかシュピーネ？」

自分で殴っておいてこの発言である。

ちなみに小男ことシュピーネの発言は訳すれば「申し訳ありません大尉」だ。

当然クロウもそれが理解できないはずがないのだが。

「ひいつ！ 申し訳ありません申し訳ありません……もう大丈夫です大丈夫ですとも大尉！」

「なら最初からそうしなさい」

「は、はいい！」

だが、それを言われた当人は恐怖と焦りで口が上手く回っていない。

クロウの部下であるからこそ、下手に逆らうとどうなるのかが身に染みて分っているのだろう。

ひよる長い体は恐れと怯えでぶるぶると震えている。

「それに、聞きましたよ。貴方「教会」と「協会」に侵入試みて失

敗したそうですねえ」

「——っ！」

「まあ、ある意味しかたがないでしょう。失敗するのも無理ありません。あそこもある意味私たちと同じ外れ者たちの集団ですから。でも——なんで一人で行きますかね？ 馬鹿ですか貴方は」

「いえ、それは大尉が「貴方は隠密とかスニーキングとか得意ですよ？ なら行けますよねえ」と仰るから……」

「でも一人で行け、なんて一言も言っていないでしょう？」

「……っ」

実に悪辣。悪辣である。

どうしようもなく面倒くさい、子供の理屈のような言葉。

ほとんど言い掛かりに近いのだが、シュピーネは否定することも出来ずにただ黙って聞くしかない。なまじ言っていること自体は嘘ではないから。

そしてクロウの口撃はまだ終わっていない。

「確かに私は貴方に命じましたよ教会に収められた「聖遺物の回収」と「情報」の入手を。で、どうです？ なにか手に入れましたか貴方？ してないでしょう、失敗しましたものねえ。」

情報に関しては、まあ律儀にも報告書を纏めて持ってきたのは褒めておきますが、あれもなんですか？ 教会と協会が保有する聖遺物の一覧表？ 現在の伝承保菌者（ゴッズホルダー）の名簿？ ああ

貴重ですね確かに。情報としてはまあ悪くない。

ですが後半からちとまずい。「途中邪魔に入った魔術師数十名、代行者数名と交戦、これを撃破するも、上位代行者との戦闘により負傷、撤退」って……」

「も、申し訳ございません！　ですが大尉、相手はただの代行者ではなく、教会の最高戦力に数えられる「弓」と称される相手！　ベイ中尉のように戦闘に特化しているならともかく、私程度ではこの相手は……」

「それでなにも回収することなく逃げ帰りました、と。だったら素直に報告書に「雑魚相手に無双したら、チヨー強い敵出てきて僕ちんアポーンになりました」とか書いとけや！」

「そ、そんな……ですが」

「言い訳なんて聞いちやあいないんですよ。失敗は失敗でしょう？　なら……相応の処罰は必要でしょう」

「ひ、ひいいい——！！」

ここに第三者がいればもはや哀れを通り越して不憫と思うだろう。まあ、いい歳した大の男が体縮めてぶるぶる震えている様を見れば不気味と思う者がほとんどだろうが。

とはいえ、

（——やっぱこいつ、いい反応するわー。かはは、ちょーウケル！）

まあ——実際のところクロウにしてみれば全部ただの冗談である。

どういう受け答えをすればシュピーネがより面白い反応を示すのか。それを実践しているだけ。言葉で言うほどには別に不機嫌でも何でもなかった。

クロウなりの彼に対する一種の信頼の表れなのだろう、多分。

さてもう少し遊ぶか——そう考えた時、

「おいおい……まーたシュピーネ虐めてんのかよ蛇野郎」

横合いからそう声を掛けられた。

「おや、起こしてしまいましたかベイ」

「あ、ああ、ベイ中尉……（た、助かりましたかね……？）」

薄壁一枚隔てた隣の客室から出て来たのは一人の男。

シュピーネと同じく黒を基調とした軍服を身に纏い、病的なまでに白い貌と白髪 of 男だ。

ベイ、とそう呼ばれた男——この航空機に彼らとともにいるのだ、当然真つ当な人間のはずもない。

彼もまた魔人の一人。

「串刺し公（カズイクル・ベイ）」「白貌鬼」とも称される黒円卓が第四位——ヴィルヘルム・エーレンブルグであった。

「てめらがごちゃごちゃと五月蠅えからだろつが。ったく、任務に失敗しただの、申し訳ありませんだのと……んな面倒臭えこたあ後でやれ後で。おちおち寝てもいられねえ」

不機嫌そうに顔を歪めてそう吐き捨てる様は、その白貌と奥に潜めた牙と含め合わせて、人間とは違うなにか別の凶悪な獣とでも対峙している印象を持たせられる。

「ははは、これは面白い。軍人である貴方があの程度の騒ぎで寝れないなんて、いやいや脳に筋肉しか詰まってないと思ってましたが意外と繊細なんですねえ」

「……んだと蛇野郎？」

「おつと失礼！ 脳に筋肉しか、は言い過ぎでした——畜生に染まる自分が嫌なんて考えてる人が脳筋だなんてそんなわけないですもんねえ……今度から二つ名を「エーデルヴァイス（気高き白）」にでも変えてみませんか？ 意外と似合いますよ性格以外」

「……あーあーなるほどなるほど……つまりあれか、お前は俺に喧嘩売ってるつー風に考えていいわけだな陰険悪辣男？ 力じゃ敵わねえからまずは口で軽くジャブからってか？ むず痒いんだよ蛇」

「——ああ？」

先に言っておくが——このやり取りは先のシュピーネとのそ

れとは性質が違う。

この二人、真剣に仲が悪い。

シュピーネの場合は上司部下としての立場から冗談込みで弄るところとは多々あるが、ベイの場合は十中八九このように陰悪な雰囲気となる。

何が気に入らないのか、昔からこうだった。

六十年以上前、初めて黒田卓で互いが互いを視界に納めた時から。

性格の違いと言うのが一番大きいだろう。特別、なにか因縁めいたものがあるわけではない。

ただただ、単純に仲が悪い。それだけ。

今でこそこうして同じ目的の為にこんな狭い航空機の客室に押し込まれてはいるが、数年ぶりに再開した両者の思いは共通していた。

やはりこいつは気に入らない、と。

「前言撤回—— やっぱてめえに気高いだとか繊細だとか似合わないわ。むしろその言葉と表現に対しての侮辱。脳筋で十分だわ白面野郎」

「ああそうかい……蛇の血なんぞ吸っても不味いだろうからなあ……ばる屑みてえにくっしゃぐしゃに磨り潰して空にばら撒いてやるよ……」

狭い客室に広がる濃密な殺意の吐息。

幻視出来るなら見たことだろう。鎌首を持ち上げる毒蛇と牙を鳴らせる白い鬼の姿が。

その気になれば、互いが互いに致命の一撃を与えることが出来る。それ程の技量の持ち主だ。

溢れる殺気は空間をまるで歪めていくかのよう。

客室の小さな窓から覗ける空は今まさに地に落ちるかのように模様を替えていく。

「ちよつ、やめて下さいお二人とも！ パイロットは普通の人間なんですから、殺気ばら撒かないで！ 落ちます！ 意識的な意味じゃなくて物理的な意味で！！」

教訓——— と言うか世の道理として、この場合迷惑を被るのは大抵無関係の周りの人間である、という一つの例であった。
とりあえずパイロットは無事でした、とだけ伝えておく。

「で……あと小一時間足らずで日本、ですか。ドイツから直で、それもわずか十数時間足らずで行けるようになるなんて、便利な時代になったものですねえ」

「は、はい。事前に用意してある離着陸場まで予定では1800に到着予定となっています」

「ただ黙って寝てりゃあ良かったのに、無駄に疲れたぜ精神的に」

先の闘争寸前の雰囲気はどこへやら。

同じ客室で用意された食事を手に大人しく座っている。
もちろん、クロウもベイも互いに遠い席だが。

「つか、マレウスの奴まだ寝てやがるのか？ あんだけ殺気出してたつてのに……鈍いんだか厚かましいんだか」

「かは……少なくともマレウスよりは精神的に繊細つてのが明らかになりましたねえベイ」

「戯れてろや。若作りの婆と一緒にすんな」

「だからやめてくださいお二人とも！」

先ほどまでの緊迫感は存在しない、ただの口喧嘩の領域。
しかし少なくともシュピーネはこの数分足らずで大分磨耗しているようだったが。

「そついえば——聞きましたよベイ」

「なんだよ」

「王立国教騎士団「ヘルシング機関」に喧嘩売ったそつじゃないですか」

「ああ……旧知の馴染みでなあ。あの狂った少佐の所は中々居心地が良かったぜえ。ある程度規律守ってさえいりゃあ後は自由だからなあ」

「昔から闘争万歳な方々でしたからねえ。いや、今回一緒に行動できないのが残念でしょうがない。」「最後の大隊（ラスト・バタリオン）」「でしたか？」

「ああ……人工吸血鬼やら人狼やら生意気な糞餓鬼やら……面白かったぜあそこは」

「なるほど確かに、貴方と波長合いそうな部隊ですねえ」

二人の会話に出てくる二つの組織。

それは欧州を代表する数多くの裏側が属する機関の中でも、昨今動きが活性化している者たちだ。

王立国教騎士団。通称「ヘルシング機関」。大英帝国と英国国教会（プロテスタント）を反キリストの化物から護るために組織された、どちらかと言うと表に近い裏。白に近い黒。その内部に、常識を軽く超えた埒外の化け物を飼っているともされる英国の守護者。

対する最後の大隊（ラスト・バタリオン）は、クロウやシュピーネ、ベイといった、かつてナチスドイツに所属していた者たちの残党が組織した部隊。その構成員は大隊指揮官である「少佐」を始め、いかれ狂った科学者や人狼、人の技術で生み出された吸血鬼・死食鬼で構成される人外の組織。完全な黒。

「ベイ中尉は確か、かの聖騎士（バラディン）とも戦り合ったとお聞きしましたが……よくご無事でしたね？ あの方も私が対峙した「弓」と並んで人外の領域の住人だと思いましたが……」

「ああ戦ったぜ。野郎は強かったがよ、結局は自分とこの教義が一番。少し連中の縄張りから離れたら追ってこなくなった。」

面倒臭かったぜあれは。なんせ刺しても貫いても潰しても……直ぐに再生して襲ってきやがるからな。「創造」使うまでじゃなかったが……あれ本当に人間かってな」

「なんだ——ようは逃げたんですか」

「阿呆……戦略的撤退か転進って呼べよ」

「大尉殿……」

内心で、なんだただの自慢話か——と思わなくもなかったが、シュピーネはそれを口に出さなかった。自分はただ蜘蛛のように陰に潜んでいればいい、と。下手に口を挟んでも碌な事にはならないのが目に見えていたから。

そんな中、ふとクロウが思い出したかのようにこんな事を言い出した。

「ふん——つまり、今私たちを積極的に狙ってきてるのは「教会」の魔術師たちだけって事ですかねえ。「協会」が自分たちの影響の薄い日本まで出張ると思えませんし」

「はい。ですが、一応は警戒はしておいたほうがいいでしょう。魔術師の中にも少なからず我々と戦えるだけの能力を持った者はいますし、丁度あのベルリンの惨劇の時期に「トゥーレ」の首領が日本に渡っているという情報も……」

「敵、敵、敵……やーれやれ周りは敵だらけですねえ。我らの首領殿も、もう少し周囲に気を配ってくださっていけば良かったのに。これじゃあ今この瞬間に敵に襲われても仕方ないですねえ」

あー嫌だ嫌だ、と面倒臭いと体全体で表現するクロウ。

だがベイはその会話を聞きつつも、大して警戒している素振りを見せずこう言っただけ。

「はっ——ここは一応高度一万メートルのお空の上だぜ？ 誰がどう仕掛けてくるっつーんだ？ 高射砲かミサイルか……まあ魔術でも似たようなことは出来るんだろうが、そんなもんで俺たちを止められるだなんて考える奴いるかね」

「一応私の聖遺物で防御陣を敷いていますから、余程の事でもない限りこの機が落ちることはないと思いますが」

まあ先ほど落ちかけましたが……。

そんなシュピーネの内情など知る由もなし。ベイはただご苦労さんどだけ言っておく。警戒するだけ疲れるだけだと。

しかし、

「あーあ……言ってしまいましたねえベイ」

「……あ？」

そんなベイの発言に対して、さも大袈裟にため息を吐くクロウ。やれやれと、嫌味つたらしく手振りも付け加えてこう言った。

「知ってますかベイ？ それをこれから行く日本ではなんと呼ぶの

「か？」

「知るかそんなもん」

「死亡フラグ——と言っただそつですよ」

第五章「空の上で」（後書き）

座について、デビルサバイバー2に出てくる「天の玉座」のポラリスなんかもそうだなーと。

スーパードヴァとか使うし、前回の座とか未来の座についても話が出てくるとか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6188w/>

神魔鳴動～裏切りの座～

2011年10月23日19時57分発行